

# 井 手 ノ 尾 遺 跡

塩水地区ゴルフ場建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

『井出ノ尾遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
8	14	不整形形	不整形
27	下	叻-ル 20m	20 cm
44	下	叻-ル 20m	20 cm
51	14	なかったが	なかった。

## 序

田野町では農地保全整備事業・工業団地の整備拡充・リゾート開発等を推進しており、これらに伴う埋蔵文化財発掘調査も年々増加の傾向にあります。

本書で報告いたします井出ノ尾遺跡は田野町塩水において計画されたゴルフ場建設に伴い、現状保存が不可能な部分について実施した発掘調査の結果を記録したものであります。

調査の結果、縄文時代早期の集石遺構や土器・石器などが確認されました。

本書を文化財愛護の啓発、郷土史研究の資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

平成4年3月31日

田野町教育委員会

教育長 鍋 倉 政 信

## 例　　言

- 本書は、平成元年度・2年度塩水地区内リゾート開発（ゴルフ場建設）に伴う井出ノ尾遺跡埋蔵文化財発掘調査の結果を報告するものである。
- 発掘調査は次の体制で実施した。

調査主体　田野町教育委員会

調査組織　田野町教育委員会 教育長　鍋倉 政信

同 社会教育課　課長 北村 光雄  
係長 長友 啓泰（調整担当）  
主査 櫛間 靖子  
(平成2年度調査事務担当)  
主査 長友 カツ子  
(平成3年度調査事務担当)

主事 森田 浩史（調査担当）

調査指導　宮崎県教育庁文化課

- 調査現場の記録写真は森田が撮影し、一部については（株）スカイサーべイの協力を得た。
- 現地における作業は広く市民の参加を得ておこなった。
- 室内での遺物・図面整理作業には、川越小百美・鶴田明子・戸村晴美（以上、平成2年度）、富中優子・的場美佐子（以上、平成3年度）らの補助を得た。
- 本書の作成、編集は森田がおこなった。
- 本書で用いた方位は磁北、標高は海拔高である。
- 本書で用いた土器の色調は農林水産省水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修の「標準土色帖」による。
- 現地調査・遺物整理作業等の実施にあたっては宮崎県文化課、並びに岩永哲夫氏、新東晃一氏、宍戸章氏はじめ埋文関係者各位の貴重な指導・助言を頂いた。

## 本　文　目　次

第I章 序 説 .....	1
第1節 発掘調査に至る経緯 .....	1
第2節 井手ノ尾遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第II章 遺構と遺物 .....	5
第1節 調査区の設定と概要 .....	5
第2節 包含層の状態 .....	5
第3節 検出遺構 .....	6
第4節 出土遺物（土器） .....	21
第5節 出土遺物（石器） .....	23
第III章 まとめ .....	51

## 挿　　図　　目　　次

第1図 町内遺跡分布図 .....	
第2図 遺跡周辺地形図 .....	4
第3図 A区土層図 .....	5
第4図 集石遺構実測図（S I - 0 7） .....	10
第5図 集石遺構実測図（S I - 0 4 • 0 5 • 1 4 • 1 5） .....	11
第6図 集石遺構実測図（S I - 1 0 • 1 6） .....	12
第7図 土坑実測図（SK - 2 7 ~ 2 9） .....	13
第8図 土坑実測図（SK - 3 0 • 3 2 • 3 3 • 3 6） .....	14
第9図 土坑実測図（SK - 3 5 • 3 7 ~ 3 9 • 5 0） .....	15
第10図 土坑実測図（SK - 4 0 ~ 4 4 • 4 8） .....	16
第11図 土坑実測図（SK - 4 5 ~ 4 7） .....	17
第12図 土坑実測図（SK - 3 1 • 4 9 • 5 0） .....	18
第13図 調査区遺構配置図 .....	19
第14図 遺物分布図 .....	25
第15図 繩文土器実測図（岩本式） .....	27
第16図 繩文土器実測図（岩本式・前平式） .....	28

第17図 繩文土器実測図（下剝峰式・桑ノ丸式）	29
第18図 繩文土器実測図（桑ノ丸式・手向山式）	30
第19図 繩文土器実測図（手向山式・塞ノ神式）	31
第20図 繩文土器実測図（塞ノ神式）	32
第21図 繩文土器実測図（塞ノ神式ほか）	33
第22図 繩文土器実測図（押型文ほか）	34
第23図 繩文土器実測図（その他）	35
第24図 石器実測図（石鎌）	36
第25図 石器実測図（石槍・石匙）	37
第26図 石器実測図（石斧・剝片ほか）	38
第27図 石器実測図（剝片・磨石）	39
第28図 石器実測図（磨石）	40
第29図 石器実測図（磨石・敲石）	41
第30図 石器実測図（敲石ほか）	42
第31図 石器実測図（石皿）	43
第32図 石器実測図（石皿）	44
第33図 町内出土壺形土器実測図	45

## 表 目 次

表 1 土器観察表	46~50
-----------	-------

## 図 版 目 次

P L 1	A区遺物出土状況
P L 2	A区遺物出土状況、遺構検出状況
P L 3	A区遺構検出状況、土層堆積状況
P L 4	S I 0 1 • 0 2 検出状況
P L 5	S I 0 3 • 0 4 • 0 5 検出状況

P L 6	S I 0 5 • 0 6 • 0 7 • 0 8 検出状況
P L 7	S I 0 7 検出状況
P L 8	S I 0 8 • 0 9 検出状況
P L 9	S I 0 9 • 1 0 検出状況
P L 10	S I 1 1 • 1 2 検出状況
P L 11	S I 1 3 • 1 4 • 1 5 • 1 6 検出状況
P L 12	S I 1 6 • 1 7 検出状況
P L 13	S K 2 7 ~ 3 3 • 3 8 ~ 4 6 検出状況
P L 14	B区全景、遺物出土状況、作業風景
P L 15	B区遺物出土状況、遺構検出状況
P L 16	S I 2 1 ~ 2 5 検出状況
P L 17	S I 1 9 • 2 0 検出状況、C区全景
P L 18	出土遺物（岩本式土器）
P L 19	出土遺物（前平式土器・下剝峰式土器）
P L 20	出土遺物（桑ノ丸式土器）
P L 21	出土遺物（手向山式土器）
P L 22	出土遺物（手向山式土器・塞ノ神式土器）
P L 23	出土遺物（塞ノ神式土器）
P L 24	出土遺物（塞ノ神式土器・押型文土器）
P L 25	出土遺物（押型文土器ほか）
P L 26	出土遺物（無文土器ほか）
P L 27	出土遺物（石鎌）
P L 28	出土遺物（石槍・石匙・剝片ほか）
P L 29	出土遺物（石斧・剝片ほか）
P L 30	出土遺物（磨石）
P L 31	出土遺物（叩き石ほか）
P L 32	出土遺物（石皿ほか）
P L 33	出土遺物（石皿）

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節 発掘調査に至る経緯

田野町では、農業基盤整備をはじめとして工業団地の整備や企業誘致に加え、リゾート開発等も推進している。その中で塩水地区においてゴルフ場が建設されることになった。平成元年2月に事業主体である（株）ニチボーから田野町教育委員会に遺跡の有無についての照会があり、予定地内において埋蔵文化財の分布調査及び試掘調査を同年3月24日から3月27日にかけて実施した。調査の結果、予定地内の通称「井手ノ尾」において繩文土器や石器を発見し、更に地形等からその範囲を推定して「井出ノ尾遺跡」とした。これにもとづき同年5月22日に遺跡の保存と工事施工の対応についてニチボー・町土地開発公社・町教育委員会の間で協議した。しかし設計上遺跡部分の現状保存及び盛土対応は不可能ということであった。その後も再三協議を行ったが、最終的に発掘調査による記録保存の方法をとることで合意した。平成2年2月19日付けで（株）ニチボーと埋蔵文化財調査の委託契約を締結し、同2月25日から発掘調査に着手した。現地におけるすべての作業は、同年5月31日に終了した。

## 第2節 井手ノ尾遺跡の位置と歴史的環境

田野町は宮崎県中南部の宮崎市の西方約20kmの田野盆地を中心とし、東西・南北は約14kmあり、総面積は109.01Km<sup>2</sup>に至る。田野盆地は南那珂山地の北西部にある、標高200m以下の台地上に、西南西に大きく入り込んだ地溝状の凹地である。

塩水地区はこの南西の複雑な山地形を中心とする。井出ノ尾遺跡は同地区南側の山の尾根上に位置する。近辺には平成元年度に実施した遺跡詳細分布調査により発見された西ノ原遺跡・片井野第1遺跡や七野地区遺跡群などがある。以下、町内の遺跡を時代別に概観しておく。

### （旧石器時代）

旧石器時代の遺跡には、ナイフ形石器が表面採集された萩ヶ瀬第2遺跡をはじめとして昭和58・59年度に発掘調査済の前平地区の芳ヶ迫第1・第3遺跡、札ノ元遺跡と昭和63年度に発掘調査済の長蔵遺跡がある。芳ヶ迫第1遺跡では集石構造が検出され、その周囲からナイフ形石器・剣片尖頭器・三稜尖頭器・彫器・搔



器などが出土している。芳ヶ迫第3遺跡では集石造構に伴った石核・剝片の他、剝片尖頭器が出土している。札ノ元遺跡では集石造構が検出され、その周囲から石核・剝片・ナイフ形石器などが出土している。札ノ元遺跡の焼石は熱ルミネッセンス法による年代測定の結果、20920B.P.の年代が得られている。長蔽遺跡ではA.T上層の褐色ローム層から石核・剝片などが出土している。

#### (縄文時代)

縄文時代早期の遺跡は町内でも最も多く、既に発掘調査済の遺跡に芳ヶ迫第1遺跡・第3遺跡、札ノ元遺跡、又五郎遺跡、長蔽遺跡、丸野第2遺跡、天神河内第1遺跡、権現谷第1遺跡・第2遺跡、前畠第1遺跡・第2遺跡、砂田遺跡、二ツ山第2遺跡と今回報告する井手ノ尾遺跡などがある。札ノ元遺跡、又五郎遺跡、権現谷第1遺跡ではこの時期の堅穴住居跡が、長蔽遺跡、権現谷第1遺跡では墓の可能性が考えられる長方形の土坑が検出されている。土器は上記の各遺跡の調査により前平式・吉田式・岩本式・下剥削式・桑ノ丸式・手向山式・平折式・塞ノ神式などの南九州において見られる早期の初頭から末葉にかけての各型式のものが出土している。詳細については各報告書等を参照されたい。

前期は丸野第2遺跡、長蔽遺跡、権現谷第2遺跡、天神河内第1遺跡・第2遺跡などがある。長蔽遺跡、権現谷第2遺跡からは少量であったが曾畠式土器が土坑に伴って出土している。

中期は丸野第1遺跡から回線文土器が出土しているのみで発掘調査による資料は現在のところない。

後期は黒草遺跡・青木遺跡・丸野第2遺跡・砂田遺跡などがある。配石造構や貯蔵穴が検出された青木遺跡では後期初頭～中頃の指宿式・綾式・下弓田式などが出土している。堅穴住居跡が検出された丸野第2遺跡では指宿式・松山式・市来式・草野式・小池原上層式・鐘崎式などが出土している。砂田遺跡では貯蔵穴と考えられる土坑に伴って後期初頭の土器が出土している。

晩期は芳ヶ迫第1遺跡・第3遺跡、丸野第1遺跡がある他、吹田遺跡から黒色の磨研土器が出土している。

#### (弥生時代)

弥生時代は終末期の土器が出土した黒草第1遺跡、方形の堅穴住居跡に伴って後期初頭の中溝式土器が出土した権現谷第1遺跡と後期前半の堅穴住居跡が検出された丸野第2遺跡がある。丸野第2遺跡のS.A.1からは磨製石鐵の未製品・剝片・製品が出土しており、石器製作址として興味深い資料である。

#### (古墳時代)

この時代のマウンドを有する古墳、集落址等の調査例・発見例はないが、地下式横穴墓が高野原遺跡、灰ケ野第1遺跡で検出されている。いずれも畑の耕作中、整地中に発見されたものである。灰ケ野1号地下式横穴墓からは人骨1体・蛇行劍1本・鉄斧1本・鐵鍔10本・刀子1本が出土している。高野原1号地下式横穴墓からは鹿角製刀装具付き劍が1本出土している。

#### (古代以降)

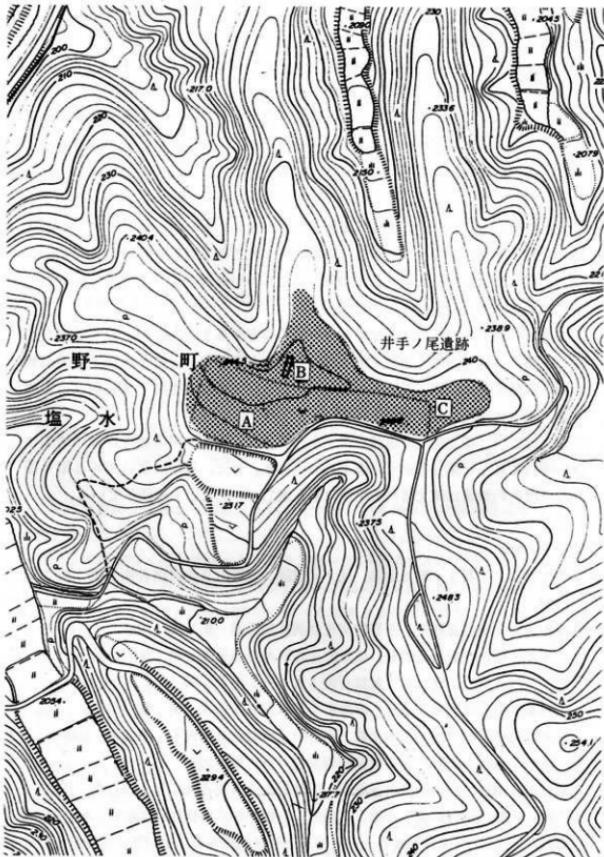
奈良時代の資料は現在のところ確認されていない。しかし、平安時代に至ると町内各地で布目痕土器が見られる。発掘調査された例に合子ヶ谷第1遺跡がある。また、前平地区の発掘調査でもこの時代の資料が少量ながら出土している。合子ヶ谷第1遺跡では土坑が検出された。

中世から近世にかけては山城や社寺・墓地などがあるが調査例としては芳ヶ迫第2遺跡と天神河内第1遺跡・第2遺跡のみである。芳ヶ迫第2遺跡では備前焼の壺、東播系の片口鉢・青磁器が出土している。天神河内遺跡では石組みの造構や溝・掘立柱建物などが検出されている。

以上のように縄文時代の遺跡が多くを占めるが、近年の発掘調査件数の増加に伴い空白であった部分も徐々に埋まりつつある。ただ、現状においてみると田野町の歴史的環境は縄文時代の生活に最も適していたことを物語っている。

#### [参考文献]

- 「芳ヶ迫第2・第3・第3遺跡、札ノ元遺跡」田野町文化財調査報告書 第3集 1986
- 「長蔽遺跡発掘調査概要」田野町文化財調査報告書 第6集 1989
- 「八重地区遺跡発掘調査概要」田野町文化財調査報告書 第7集 1989
- 「合子ヶ谷遺跡」田野町文化財調査報告書 第8集 1989\*
- 「前畠第1遺跡発掘調査概要」田野町文化財調査報告書 第9集 1990
- 「田野町遺跡詳細分布調査報告書」田野町文化財調査報告書 第10集 1990
- 「丸野第2遺跡」田野町文化財調査報告書 第11集 1990
- 「前畠第2遺跡、砂田遺跡調査概要」田野町文化財調査報告書 第12集 1991
- 田中茂「宮崎郡田野町灰ケ野地下式横穴」宮崎県総合博物館研究紀要 No.1 1972
- 「高野原地下式1号墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書 第24集 宮崎県 1981



## 第2図 遺跡周辺地形図

-4-

第 II 章 遺構と遺物

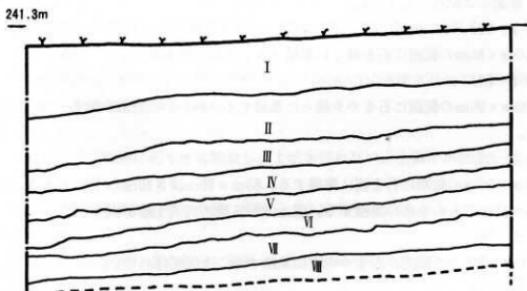
## 第1節 調査区の設定と概要

井手ノ尾遺跡は標高約244m前後の狭い尾根上に位置する。現地形は尾根に沿った僅かな平坦地、北側の緩斜面と南側の比較的急な斜面からなる。調査区は施工上の削平部分にあたる畠地と山林について便宜的にA・B・Cの3区を設定した。調査面積はA区が3,300m<sup>2</sup>、B区が1,700m<sup>2</sup>、C区が780m<sup>2</sup>の全体で約5,800m<sup>2</sup>に至った。

A区の調査では、縄文時代早期（以下早期と記す）の集石遺構が25基と、時期不明の土坑がA区で23基、B区で1基検出され、遺物は各調査区から早期の土器・石器（石鏃・石槍・石匙・スクレイバー・石斧・石皿・すり石・敲石・剣片・チップ）などが出土した。

## 第2節 包含層の状態

当遺跡は〔第Ⅰ層〕表土または耕作土、〔第Ⅱ層〕火山灰(赤ホヤ二次堆積)、〔第Ⅲ層〕火山灰(赤ホヤ堆積)、〔第Ⅳ層〕暗褐色ブロックを含む灰黄褐色土、〔第Ⅴ層〕褐色土、〔第VI層〕にぶい黄褐色土、〔第VII層〕にぶい黄橙色土、〔第VIII層〕火山灰(A T堆積)を基本層序とし、遺物は第IV～VI層掘り下げの段階で出土した。この層序から各遺物の新旧関係等を明確にするまでは至らなかつた。部分的にはあるが木根等による搅乱を受けたためとみられる。



第3図 A区西侧土層図 S=1/40

-5-

### 第3節 検出遺構

試掘調査の段階で既に早期以降の包含層等は消滅していることを確認していたが、新しい時期（平安時代？）の土器片も表露されていたので、A区の東半部分について赤ホヤ上面まで掘り下げて検出作業を行った。土坑を23基確認した。形状は円形や長方形・楕円形のものもあったが、大半は不整形なものであった。いずれも遺物の出土は無かった。埋土は黄褐色土もしくは黄橙色土で概ね共通しており、ほぼ同時期に埋没したものとみられる。他の調査区においても部分的に検出作業をおこなったが、B区で1基確認されたのみであった。

早期については、赤ホヤ層下の第IV層からVI層にかけて遺物を確認し、第V層の上面を中心として集石遺構を検出した。この分布はA区西半及びB区西半に限定されたが、一箇所に密集した状況はなかった。焼礫の集積状態は密なものと疎らなものがあり、土坑内に配石を伴うものもみられた。

#### —集石遺構—

(S I -01)

160cm×150cmの範囲に石をやや疎らに集積する。106cm×110cm深さ40cmの土坑を伴い、底面には配石が見られた。

(S I -02)

190cm×150cmの範囲に石をやや密に集積する。79cm×86cm深さ14cmの土坑を伴い、底面には配石が見られた。

(S I -03)

110cm×85cmの範囲に石を疎らに集積する。土坑を伴わない。

(S I -04)

100cm×90cmの範囲に石をやや疎らに集積する。143cm×92cm深さ10cmの土坑を伴う。

(S I -05)

96cm×90cmの範囲に石を密に集積する。88cm×70cm深さ10cmの土坑を伴う。石は10~15cmのものを密に集積する。埋土内から桑ノ丸式土器が出土した。

(S I -06)

140cm×125cmの範囲に石をやや密に集積する。土坑を伴わない。

(S I -07)

185cm×150cmの範囲に石を密に集積する。167cm×160cm深さ50cmの土坑を伴い、

底面には配石が見られた。埋土内から炭化物や土器片が出土した。

(S I -08)

110cm×90cmの範囲に石を密に集積する。140cm×130cm深さ50cmの土坑を伴う。埋土内から、炭化物がみられた。

(S I -09)

120cm×100cmの範囲に石を密に集積する。80cm×68cm深さ13cmの土坑を伴う。埋土内から、炭化物が少量みられた。

(S I -10)

105cm×110cmの範囲に石を密に集積する。95cm×90cm深さ18cmの土坑を伴い、底面には配石が見られた。埋土内から桑ノ丸式・手向山式の土器片が出土した。

(S I -11)

75cm×65cmの範囲に石を密に集積する。土坑を伴わない。

(S I -12)

114cm×105cmの範囲に石を密に集積する。ごく浅い土坑を伴う。

(S I -13)

114cm×105cmの範囲に石を密に集積する。ごく浅い土坑を伴う。

(S I -14)

90cm×82cmの範囲に石をやや疎らに集積する。90cm×80cm深さ10cmの土坑を伴い、埋土内から少量の炭化物がみられた。

(S I -15)

100cm×95cmの範囲に石を密に集積し、87cm×90cm深さ13cmの土坑を伴う。

(S I -16)

125cm×120cmの範囲に石を密に集積する。118cm×110cm深さ21cmの土坑を伴い、埋土内から少量の炭化物がみられた。

(S I -17)

50cm×50cmの範囲に石を密に集積し、土坑を伴わない。土器片が出土した。

(S I -18)

80cm×60cmの範囲に石をやや密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -19)

50cm×50cmの範囲に石を疎らに集積し、土坑を伴わない。

(S I -20)

75cm×50cmの範囲に石を疎らに集積し、土坑を伴わない。

(S I -21)

60cm×45cmの範囲に石をやや密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -22)

95cm×90cmの範囲に石を密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -23)

90cm×85cmの範囲に石をやや密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -24)

70cm×40cmの範囲に石をやや密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -25)

140cm×90cmの範囲に石を密に集積し、土坑を伴わない。

(S I -26)

60cm×50cmの範囲に石を疎らに集積し、土坑を伴わない。

(S K -27)

162cm×105cmで深さ70cmの不整形なプランを呈す。

(S K -28)

250cm×150cmで深さ68.8cmの不整形なプランを呈す。SK-27埋没後に掘り込まれる。

(S K -29)

369cm×216cmで深さ72cmの不整形なプランを呈す。

(S K -30)

243cm×126cmで深さ54cmの不整形なプランを呈す。

(S K -31)

326cm×200cmで深さ75cmのやや崩れた方形のプランを呈すが、底面は不整形である。

(S K -32)

268cm×120cmで深さ34.5cmの梢円形のプランを呈す。

(S K -33)

185cm×130cmで深さ80cmの不整形なプランを呈す。

(S K -34)

115cm×72.5cmで深さ40cmの方形のプランを呈す。

(S K -35)

145cm×72cmで深さ48cmの不整形なプランを呈す。

(S K -36)

238cm×55cmで深さ88cmの長方形のプランを呈す。

(S K -37)

80cm×77cmで深さ31.5cmのほぼ円形のプランを呈す。

(S K -38)

172cm×91cmで深さ56cmのほぼ梢円形のプランを呈す。

(S K -39)

163cm×90cmで深さ48cmの不整形なプランを呈す。

(S K -40)

132.5cm×130cmで深さ25cmのほぼ正方形のプランを呈す。

(S K -41)

188cm×93cmで深さ33cmの梢円形のプランを呈す。

(S K -42)

278.5cm×117cmで深さ43cmの不整形なプランを呈す。

(S K -43)

74cm×67cmで深さ38cmの不整形なプランを呈す。

(S K -44)

93cm×64cmで深さ30cmの長方形に近いプランを呈す。

(S K -45)

251cm×126cmで深さ40cmの不整形なプランを呈す。

(S K -46)

230cm×62cmで深さ70cmの長方形のプランを呈す。

(S K -47)

299cm×156cmで深さ56cmの不整形なプランを呈す。

(S K -48)

95cm×72cmで深さ20cmの不整形なプランを呈す。

(S K -49)

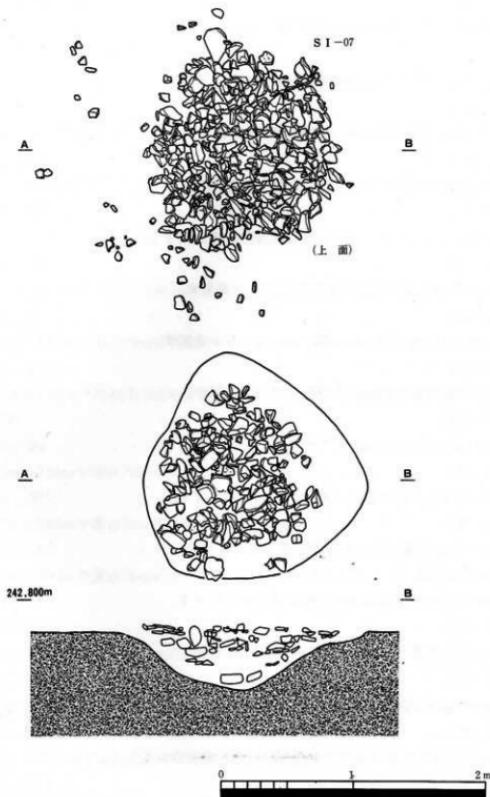
164cm×106cmで深さ23cmの長方形のプランを呈す。

(S K -50)

133cm×73cmで深さ17cmのやや崩れた長方形のプランを呈す。

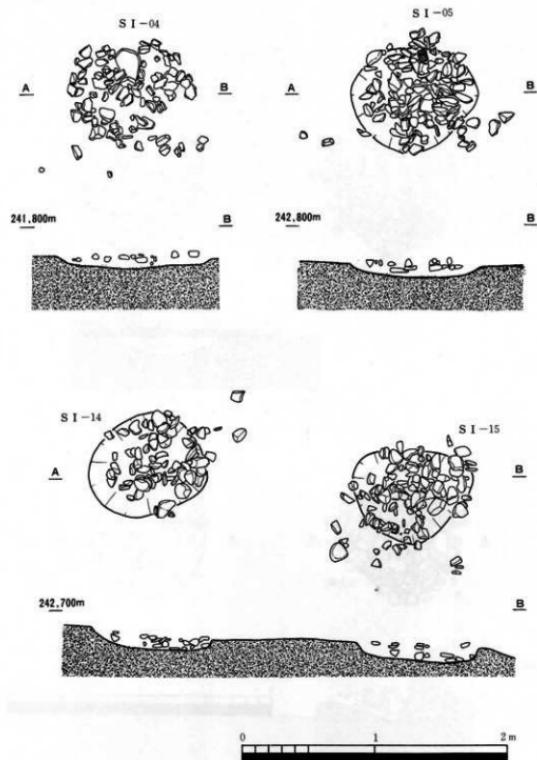
(S K -51)

162cm×110で深さ85cmのやや崩れた梢円形のプランを呈す。



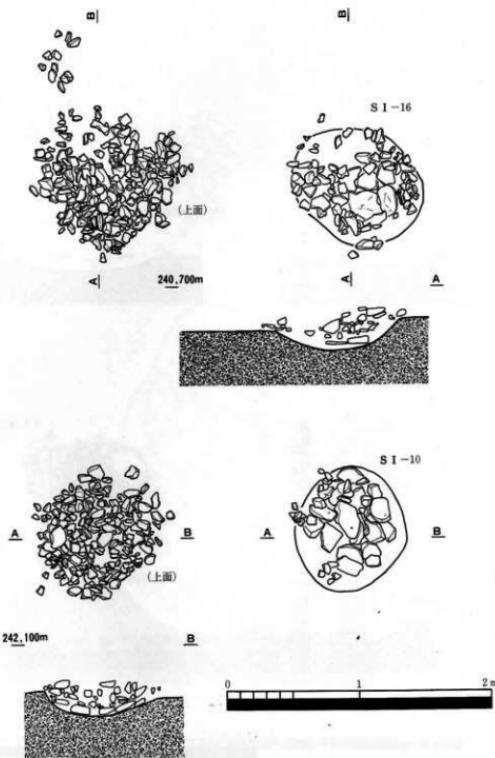
第4図 集石遺構実測図 S = 1 / 30

- 10 -



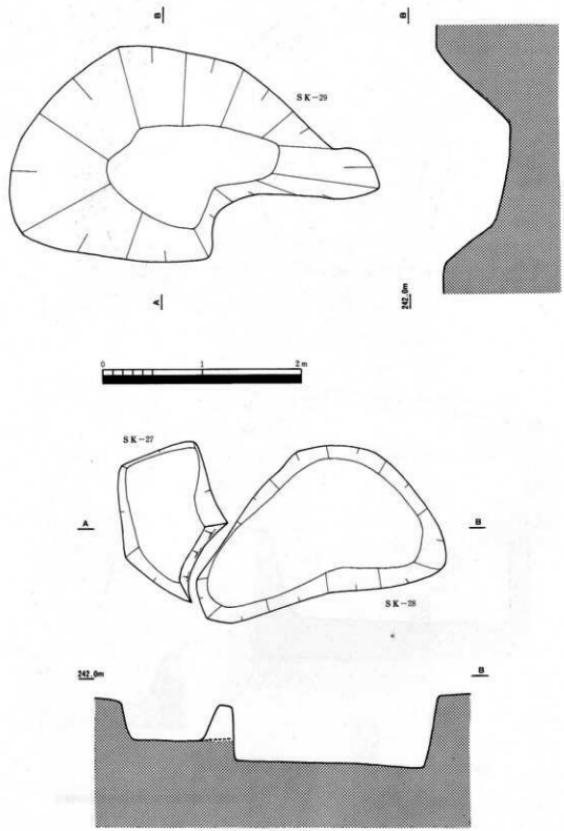
第5図 集石遺構実測図 S = 1 / 30

- 11 -



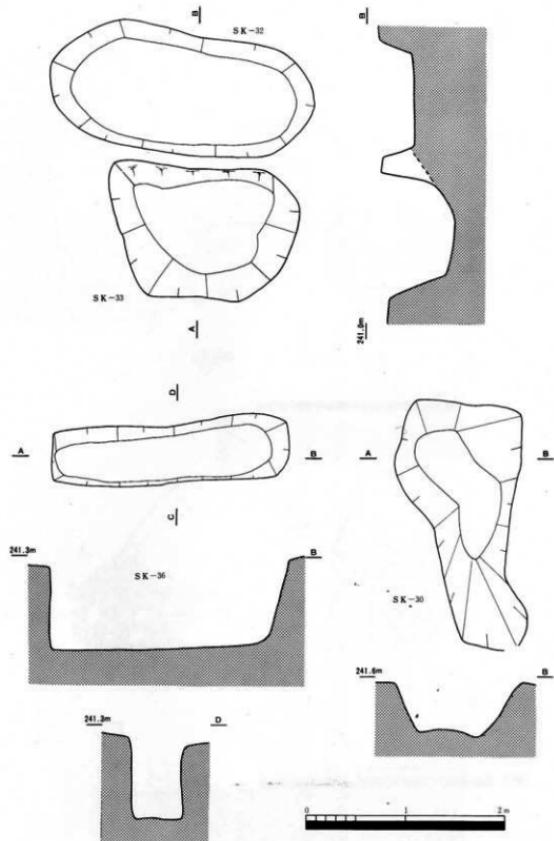
第6図 集石遺構実測図 S = 1 / 30

- 12 -



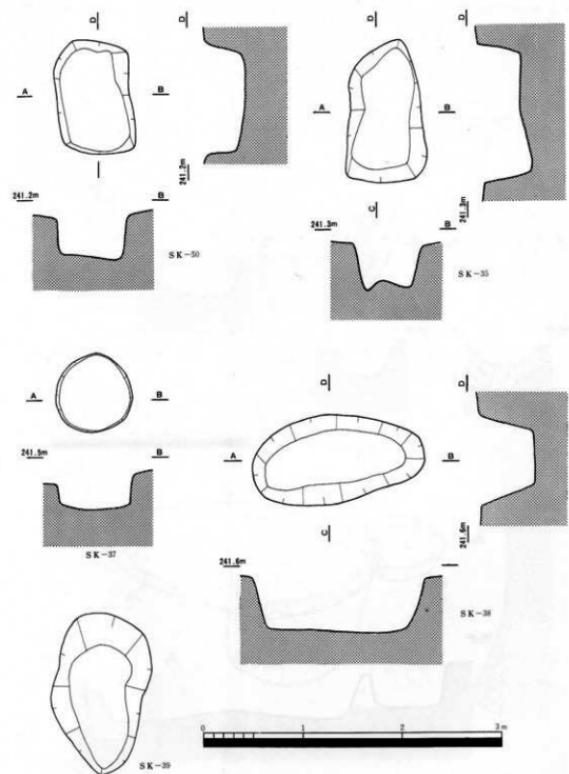
第7図 土坑実測図 S = 1 / 40

- 13 -



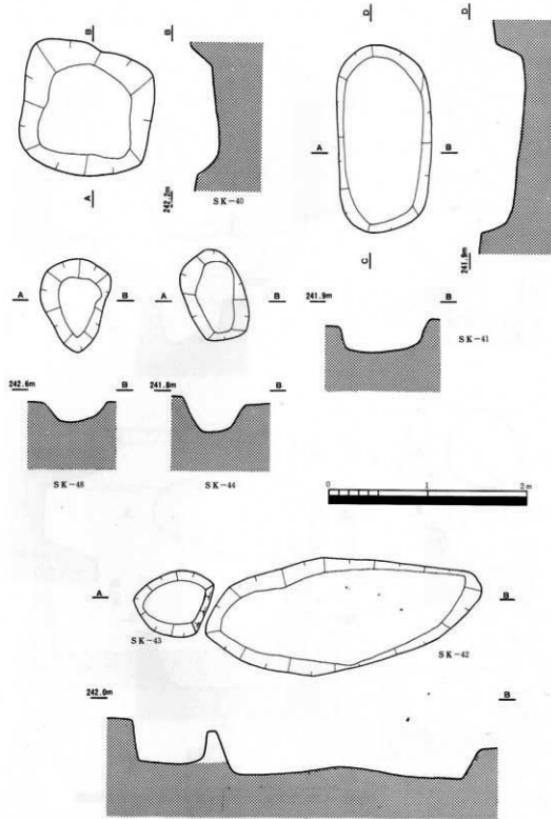
第8図 土坑実測図 S = 1 / 40

- 14 -



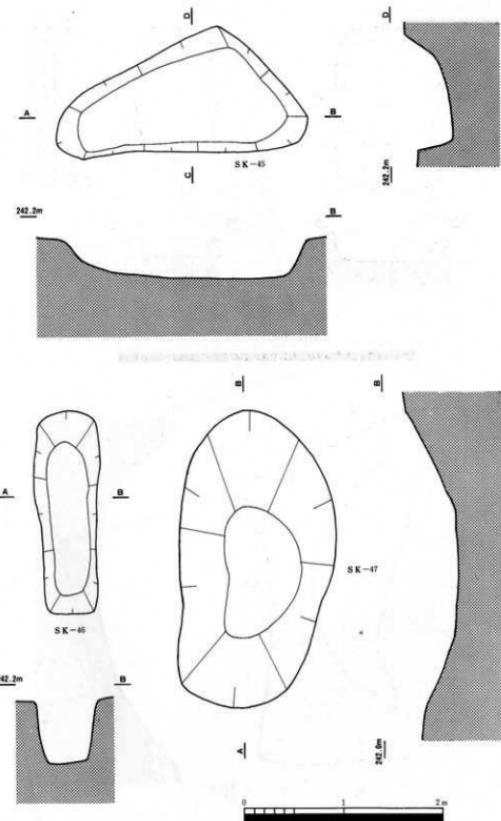
第9図 土坑実測図 S = 1 / 40

- 15 -



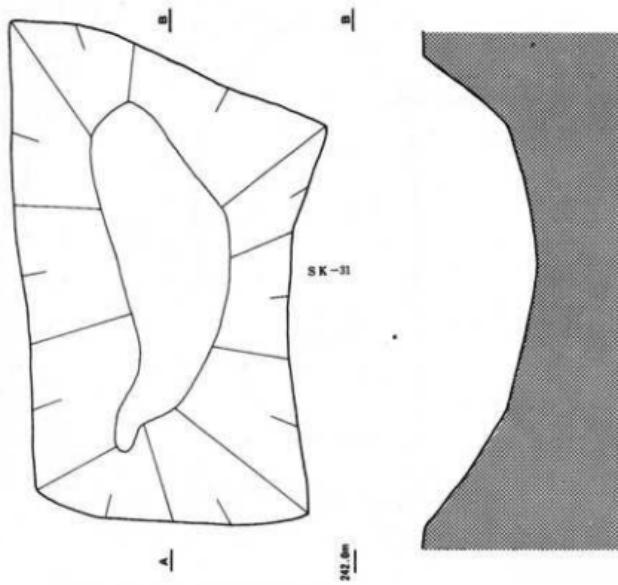
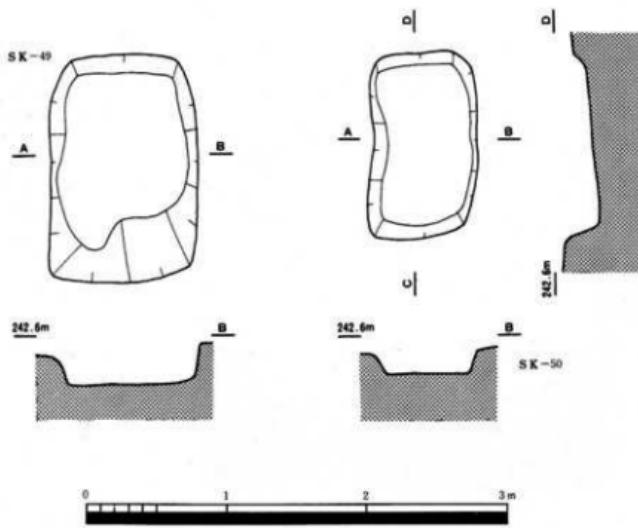
第10図 土坑実測図 S = 1 / 40

- 16 -



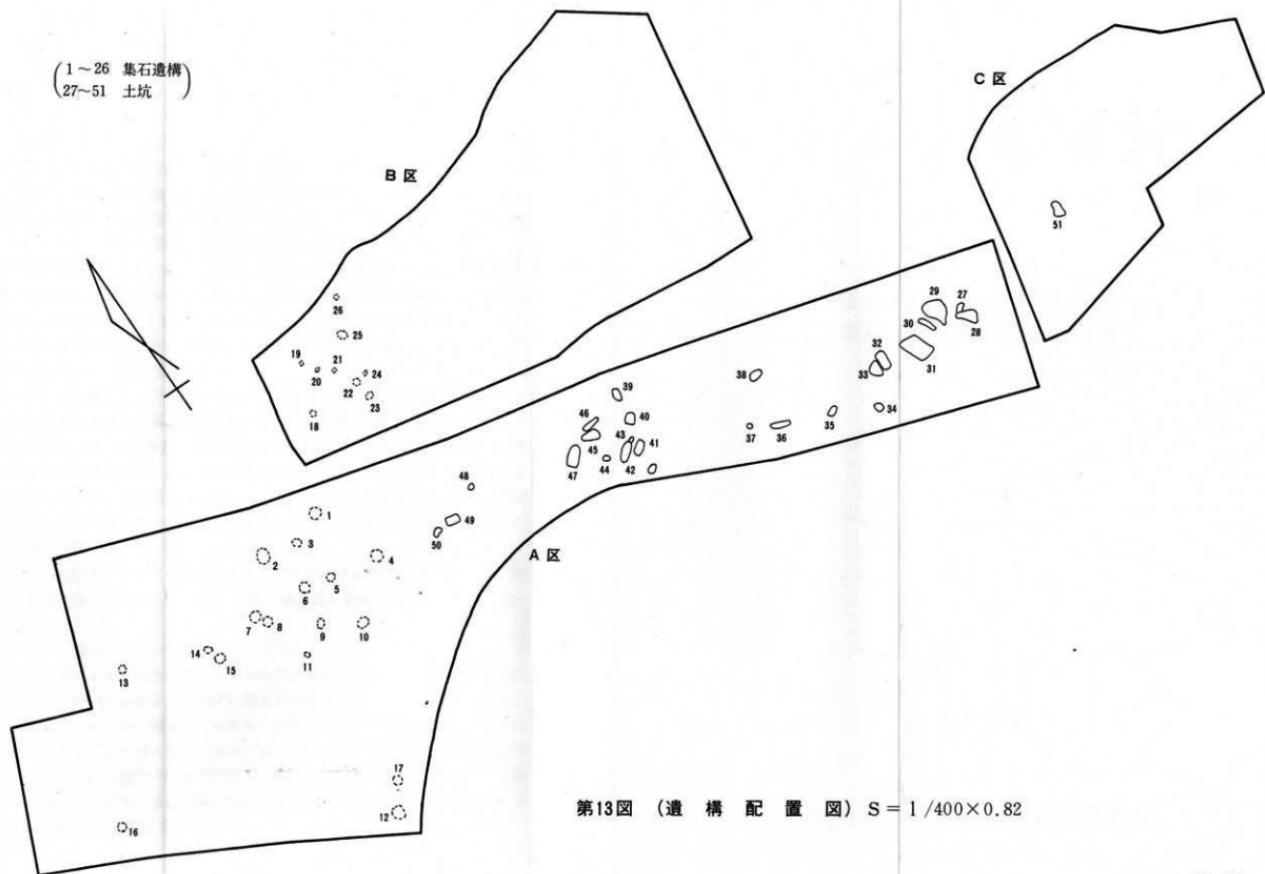
第11図 土坑実測図 S = 1 / 40

- 17 -



第12図 土坑実測図 S = 1 /40

(1~26 集石造構)  
(27~51 土坑)



第13図 (遺構配置図) S = 1/400×0.82

#### 第4節 出土遺物（土器）

概ね早期のもので、岩本式・前平式・下剥峰式・桑ノ丸式・手向山式・塞ノ神式と、詳細な分類を避けた押型文土器や無文土器等がある。また草創期の爪形文土器の可能性が考えられるものも少量ながら出土した。

##### —岩本式土器—（1～15）

口縁部内側をナデもしくは削って断面三角形の口唇部を作り、ここにヘラ状工具または貝殻による刻目を施すことによって波状の口縁部に仕上げるものである。口縁部直下に縦位の貝殻刺突文をめぐらすもの（1・2・4）、斜位の貝殻刺突文をめぐらすもの（15）と更に横位の貝殻刺突線文を組み合わせせるもの（5・8）、横位の貝殻刺突線文を3もしくは4条めぐらすもの（10～13）、貝殻連続刺突文と横位の貝殻刺突線文を組み合わせせるもの（3・6・7・9）がある。地文はいずれも荒い条痕であるが、（1・2・13・15）を除いては、更にこれをナデ消す。内面は斜位の条痕を施すものとナデにより仕上げるものがある。

##### —前平式土器—（16～23）

（16・17）は口縁部とその直下にヘラ状工具による連続押圧文をめぐらすもので、外面は横位の丁寧な条痕、内面はやや荒い条痕を施す。内外面ともに同一の原体を使用する。（19）は口唇部に貝殻連続刺突文をめぐらし、地文に斜位の条痕を施す前平式の典型で（20～23）はこの体部とみられる。内面についてはいずれも摩滅が著しいが、一部条痕がみられた。（18）はやや丸みをもつ口唇部に棒状工具の押圧による刻目をめぐらし地文に斜位の条痕を施すものである。

##### —下剥峰式土器—（24～27）

いずれも貝殻刺突により文様を構成するもので、斜位または羽条の刺突文を横位の刺突線文で画するもの（24・27）、縦位の刺突線文をめぐらすもの（25・26）とがある。

##### —桑ノ丸式土器—（28～40）

櫛齒状施工具による文様を主体とするもので、器面全体を羽条に施文するもの（28・29・32～34・40）、縦または斜位に施文するもの（30・31・35・38・39）、不定方向に施文するもの（36・37）がある。大半は口縁部が内傾するものであるが、直線的なもの（32・34・38）もある。また（38）は口縁部直下に瘤状の貼付突帯をめぐらし、胴部途中でくびれて外方へ膨らむも器形を呈するもので、下剥峰式からの流れが看取される。内面はナデまたはケズリによって丁寧に仕上げるが、（38）は例外的に条痕がみられる。

—手向山式土器— (41~72・107・139)

(41~46・51・56~58・63) は山形押型文を施すものである。(41・42・45・57・63) は口縁部で、(45) は口縁部の貼付突帯部分のみに施文がみられる。(57) は口唇部のやや荒いナデにより、シャープな三角形の断面をつくる。(63・42) は口縁部内面直下にも施文される。口唇部に刻目をめぐらして波状の口縁をつくる。

(44・51・56) は胴部のくびれ部分で(44) はそこに貼付突帯をめぐらして貝殻による刻目を施す。(49・50・52~55) は格子目押型文を施すもので(55) は口唇部にも施文される。

(59~62・64~66・72) 山形押型文を地文としてその上から凹線文を施すもので、口縁部(59~62・72) はいずれも刻目をめぐらして波状につくり(62・72) を除いて内面にも施文される。(72) は貝殻による刻目を施した継位の貼付突帯がみられる。

(65~70) は押型文を地文とせず凹線文を施すもので、(65) は口縁部に刻目をめぐらして波状につくり、(66・68) は浅い押圧による刻目をめぐらす。また(66) はその直下に2条の荒い刻目をめぐらす。

(47・48・107) は撫糸文を施すもので、内面は丁寧なナデにより仕上げる。以上上の土器はやや薄手で施文の浅いものが多く、口縁部は(45) を除いて比較的大きく外反する。内面の調整はすべてナデにより仕上げるものである。

(139) は口縁部に浅い刻目をめぐらし、以下に沈線とヘラ状工具による刺突文などで文様を構成するもので、口径・器形等からいわゆる「壺形土器」が想定される。

—塞ノ神式土器— (73~106・124)

大判が貝殻条痕文と貝殻押引文を文様構成の主体とするものである。(73・74・76・77・80・82~84・86・90・94) は貝殻押引文を主体とする口縁部で、いずれも口唇部に刻目をめぐらす。(86・90・94) はこの文様帶の下部に条痕文がみられる。胴部については、おそらく大半がこれらに統く破片であるとみられる。条痕文で無文部分を画して文様帶とするもの(88・94・95~101・102・104・105) もある。(91~93) はヘラ状工具による押圧刻目をめぐらすもので、文様帶の下部に浅い条痕がみられる。(91) は口唇部にごく浅い刻目をめぐらす。

(106) は撫糸文と条痕文で無文部分を画して文様帶をつくるもので、この文様パターンは当調査において1点のみの出土である。

—押型文土器— (108~123・138)

山形文(108~111・114・115~118・121・139)、楮円文(112・113・120・122)、山形文と楮円文を組み合わせるもの(119・121) の他、摩滅により不鮮明であるが格子目文とみられるもの(123) がある。(109) の内面は口縁部直下に山形文を施した上から更に押圧文を施すものである。(111) は口縁部直下に(110) は更に口唇部に山形文を施すもので、おそらく手向山式あたりに相当するものとみられる。(113) は底部で木葉の圧痕がみられる。

—無文土器— (125~128・130~137)

(125~127) は口縁部で(125・126) は内傾するものである。胴部・底部(137) とも薄手のものが多く、おそらく手向山式あたりに相当するものとみられる。

—その他の土器—

(129) は荒い条痕を施したのちナデにより仕上げるもので、円筒形のものとみられる。

(140) は条痕を地文として器面にミミズ腫れ状の突帯を不定方向に貼付けるものでおそらく下剝峰式あたりに相当するものとみられる。

(141・142) は口縁部にやや深い刻目をめぐらすもので、内外面ともに無文でありナデにより仕上げる。

(143) は爪の押圧による文様を施すもので、内面はナデにより仕上げる。岩本式以前にまで遡る可能性が考えられる。

(144・145) はヘラ状工具の押圧による刻目をめぐらすもので、内面は丁寧なナデにより仕上げる。

(146) は底部で、底面にやや粗雑なヘラ描きによる鋸歯状の文様を施す。

(147) は内外面ともにナデにより仕上げているが、外面に僅かながら山形押型文らしき痕跡がみられる。器面は凹凸があり粗製である。土製円板の可能性も考えられる。

## 第5節 出土遺物（石器）

—石 鋼— (148~184)

各検査区から総数58点出土した。石材には姫島産を含む黒曜石・チャート・頁岩・粘板岩をはじめ多種みられる。(181・182) は平基無茎鐵で(180) はやや円茎鐵に近い形状を呈す。これらの他はすべて凹基無茎鐵である。(148~151) は両側縁に突起部をつくる。(154~158) は鍾形鐵である。(162~179) は基部の抉りが浅いもので、当遺跡においてはこれが大きい割合を占める。

—石 槍— (184~186)

(184) は片面両側と片面片側より荒い加工を施し、一部自然面を残す。(185・186) は両面加工により刃部をつくり、レンズ状の断面を呈する。(184・185) は粘板岩系のもの、(186) は頁岩を石材とする。

#### —石匙— (187・188)

(187) は縦型石匙で、片側を両面から調整加工し刃部をつくる。石材は頁岩とみられる。(188) は横型石匙で、下端部を両面から細かく調整加工し刃部をつくる。石材は粘板岩系のものとみられる。

#### —スクレイパー— (189・190)

(189) は横長剝片を素材とし、下端部を両面から細かく調整加工し刃部をつくる。一部を欠損する。石材は安産岩系のものとみられる。(190) は不整形な台形を呈し、下端部を片面から調整加工し刃部をつくる。硬質の砂岩を石材とする。

#### —石斧— (193・194)

(193) はチャートを石材とするもので、荒い加工によりやや厚手に仕上げる。刃部は両刃で体部は一部自然面を残す。(194) の刃部は両刃でシャープに仕上げ一部研磨の痕跡がみられる。

#### —剝片・石核— (195~212)

石材は黒曜石・チャート・粘板岩・蛇紋岩・安産岩・硬質の砂岩等がある。(99・201・205・209) はいずれも縦長剝片で二次加工または使用痕がみられる。

#### —磨石— (213~227)

形状は円形・楕円形のものもある。(213~216) は尾鈴山麓産の酸性岩類で(215) は焼け石に転用されたものである。(216・220・223・224) は側縁部に敲打痕がみられる。

#### —敲石— (228~237)

若干疑わしいものもあるが、形状等からこれに分類した。(235・237) は手斧等の用途も考えられる。

#### —石皿— (240~246)

(245) を除いて焼け石に転用されている。(241) は裏面を皿の底部状に明瞭な稜線をつくる。

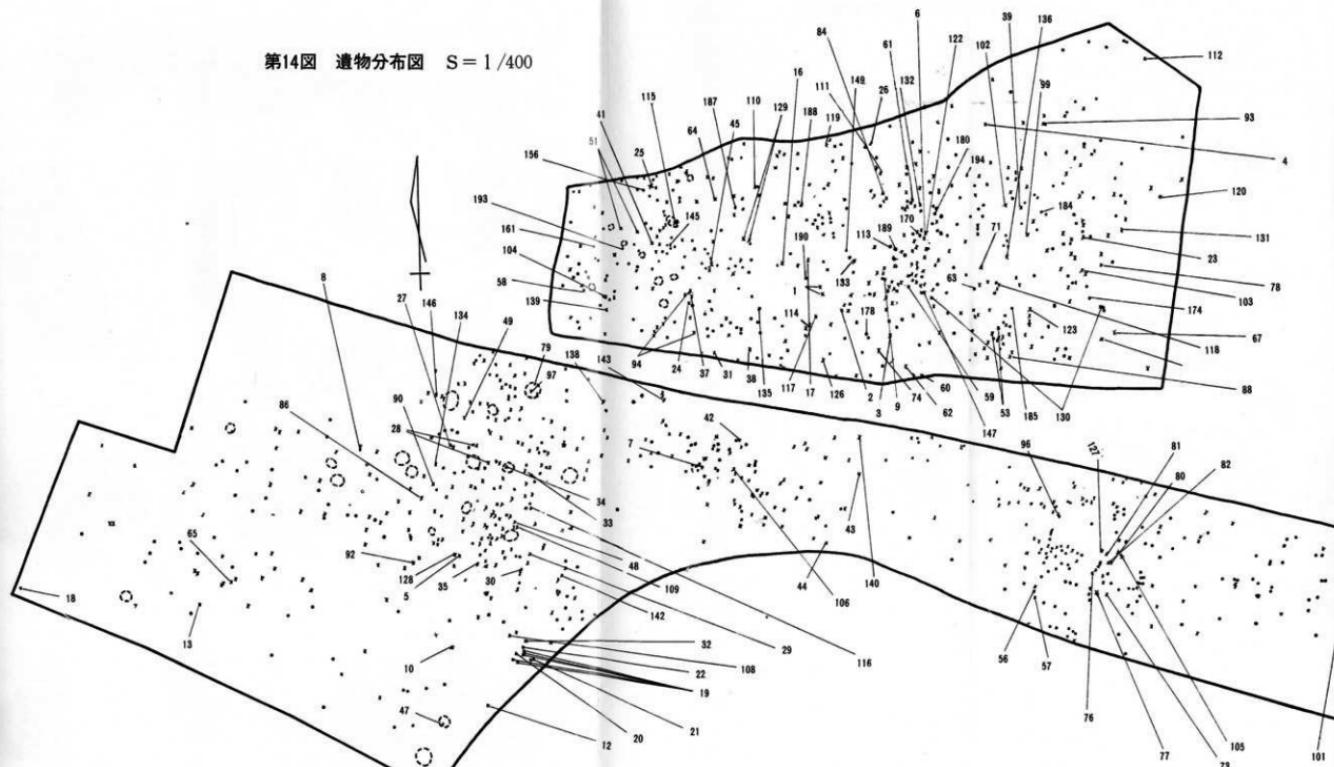
#### —用途不明石器— (238・239)

スタンプ形を呈す。類例資料の増加を待って再度検討したい。

#### —その他石製品— (191・192・212)

(192) は不整形な台形を呈し、片側からの削孔がみられる。(212) は磨滅が著しく加工痕等は観察できないが、2側辺をシャープに加工し刃部をつくる。

第14図 遺物分布図  $S = 1/400$

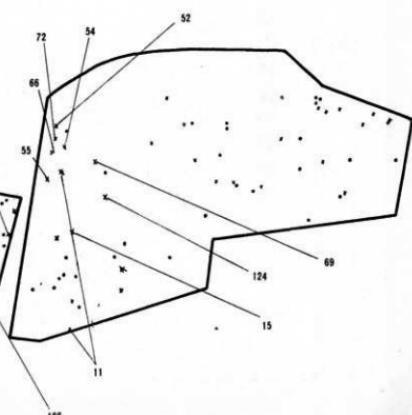
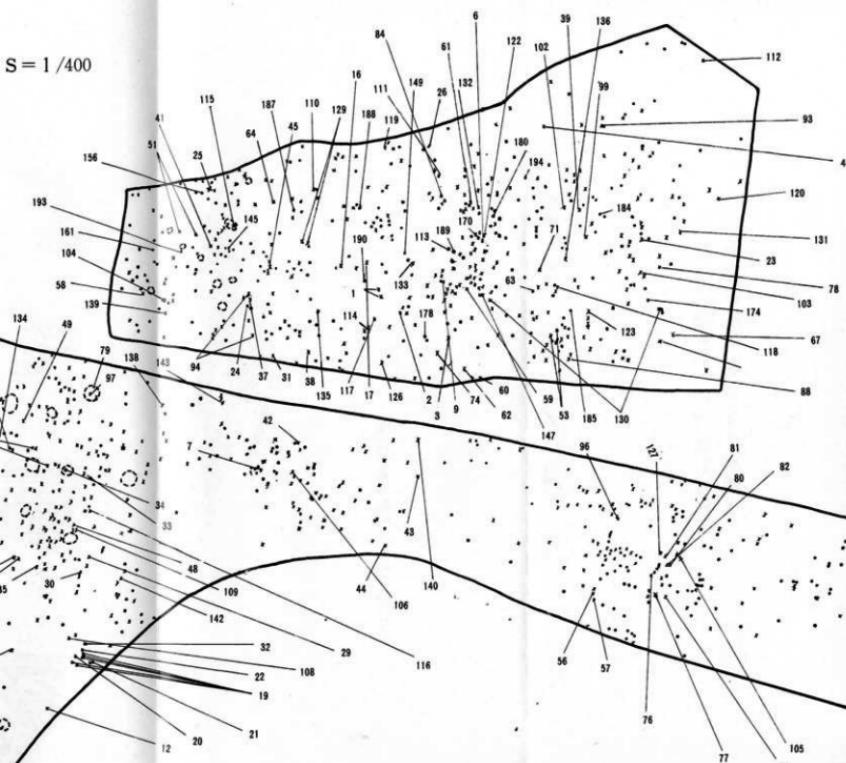


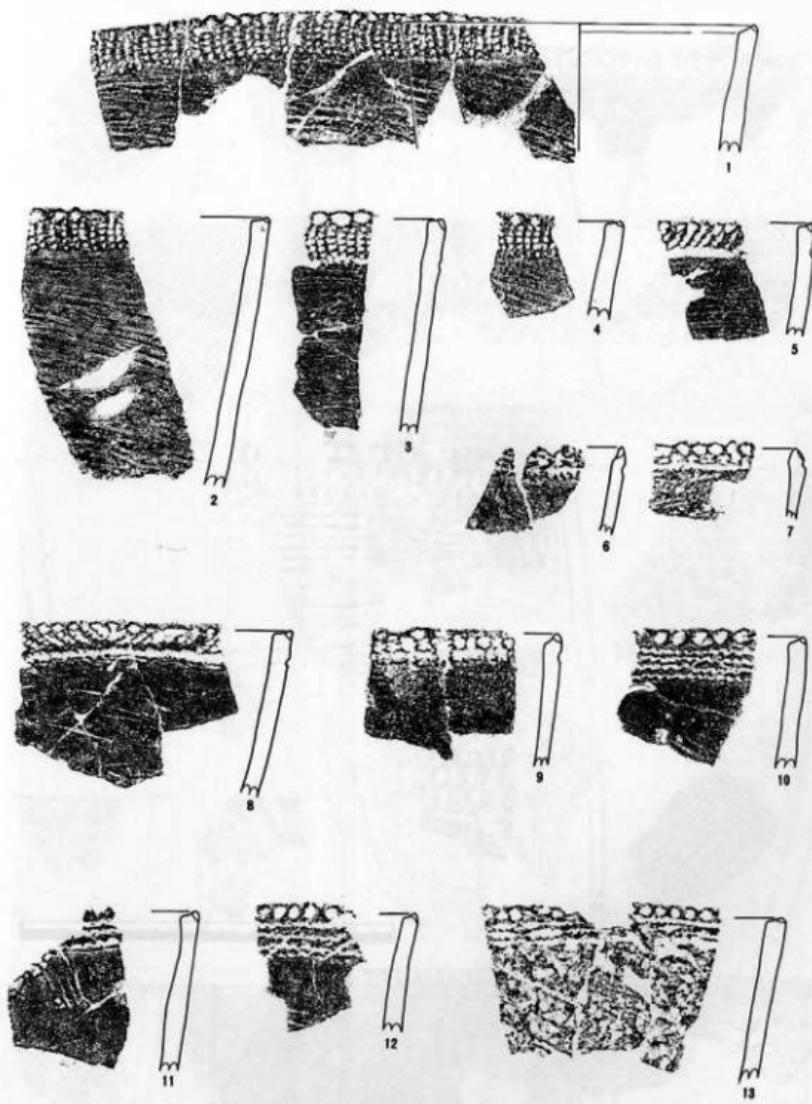
× (土器)

● (石器)

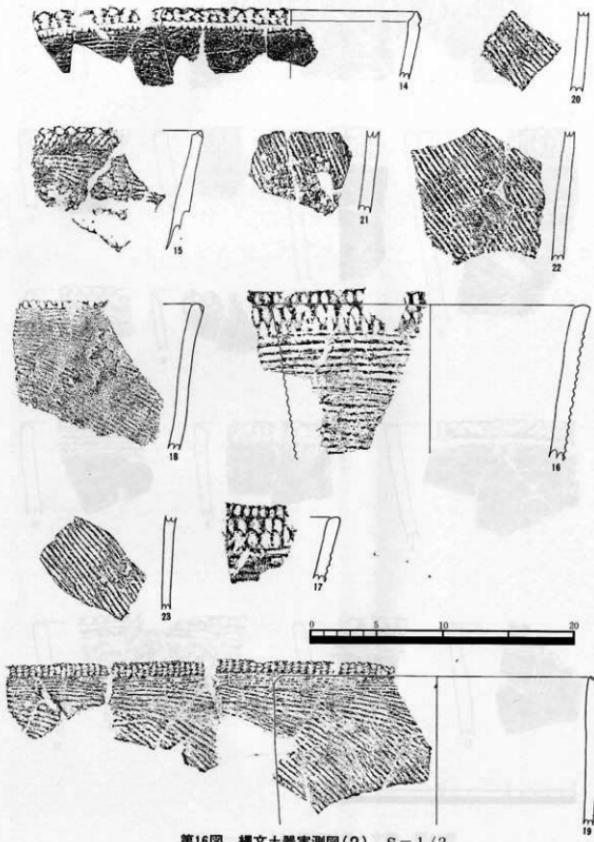
○ (集石遺構)

S = 1 /400



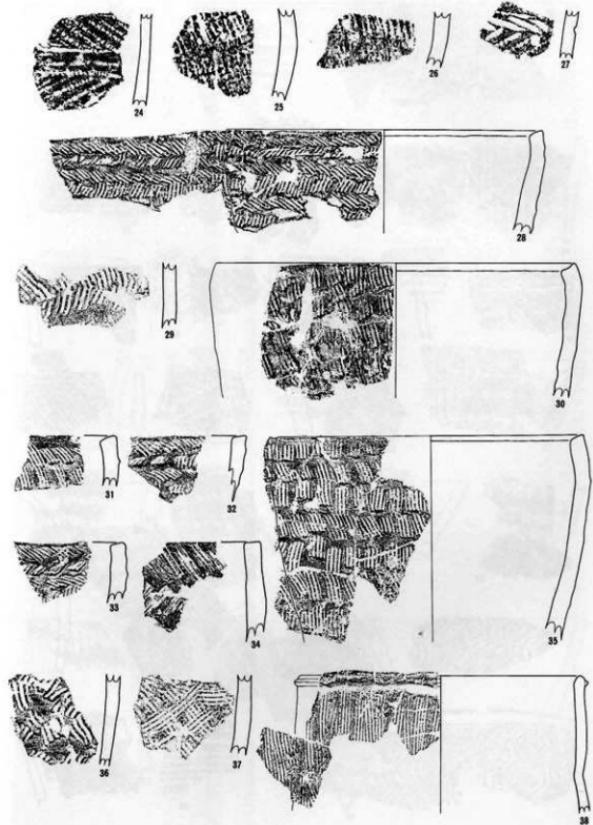


第15図 縄文土器実測図(1) S = 1 / 3



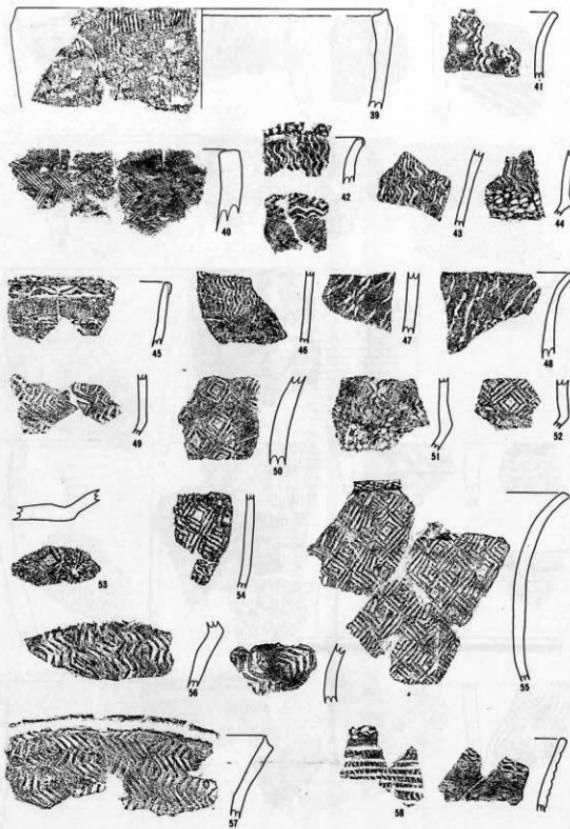
第16図 繩文土器実測図(2) S = 1/3

- 28 -



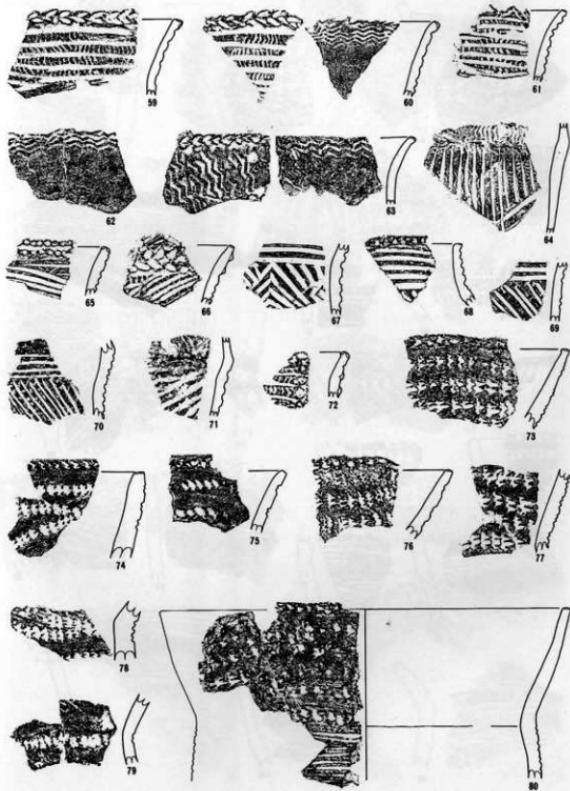
第17図 繩文土器実測図(3) S = 1/3

- 29 -



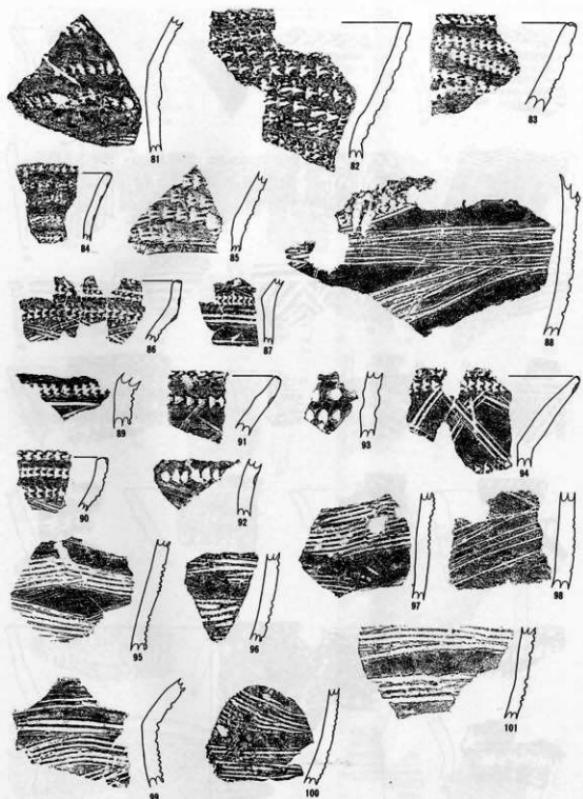
第18図 縄文土器実測図(4) S = 1 / 3

- 30 -



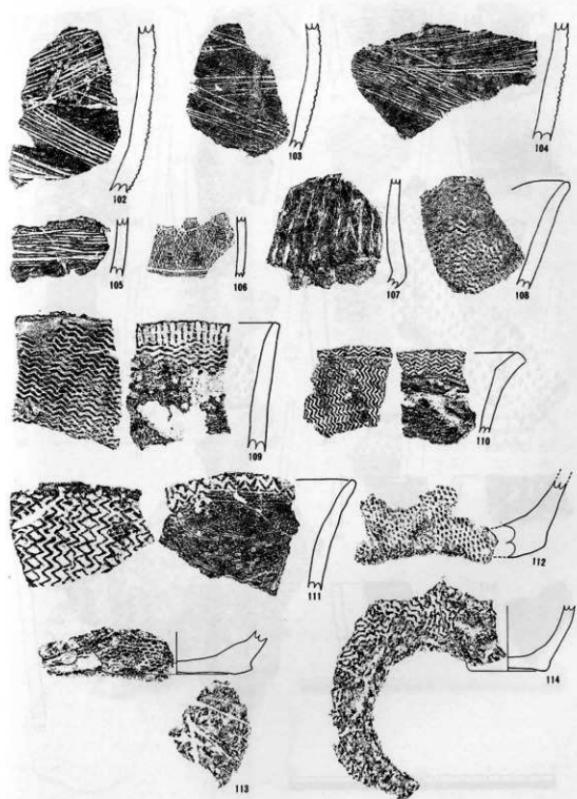
第19図 縄文土器実測図(5) S = 1 / 3

- 31 -



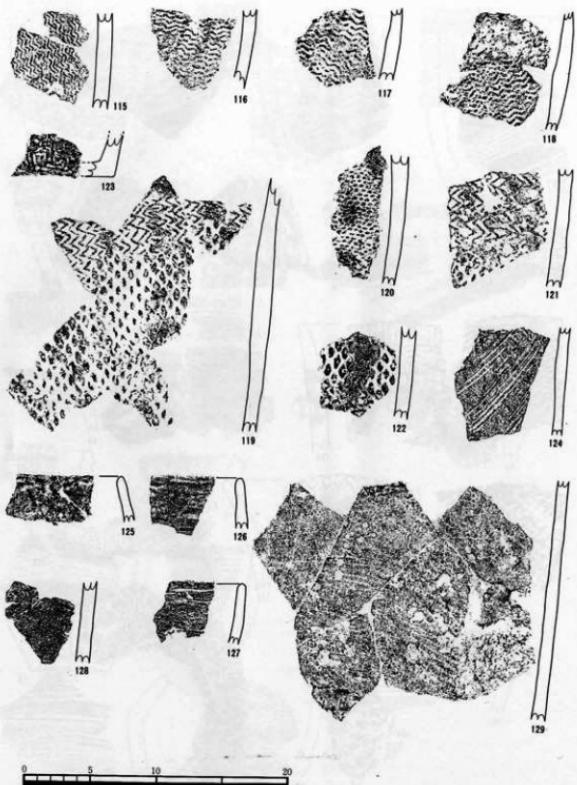
第20図 縄文土器実測図(6) S = 1/3

- 32 -

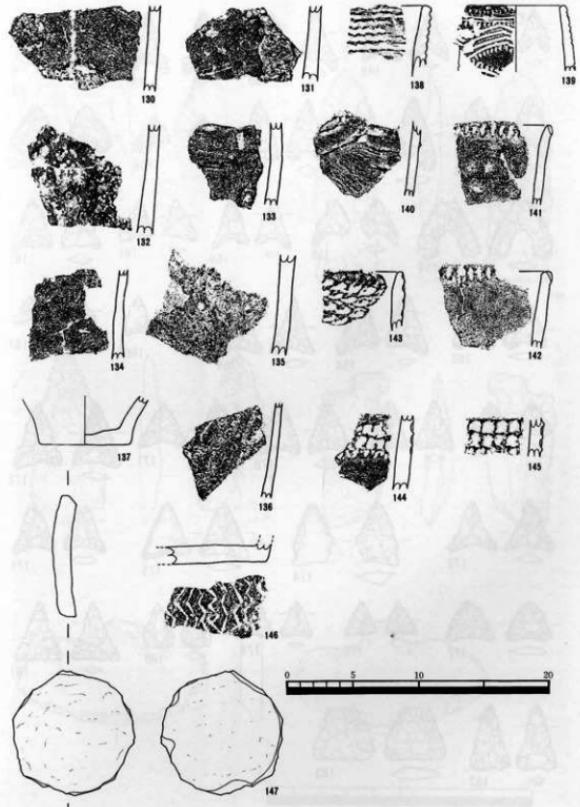


第21図 縄文土器実測図(7) S = 1/3

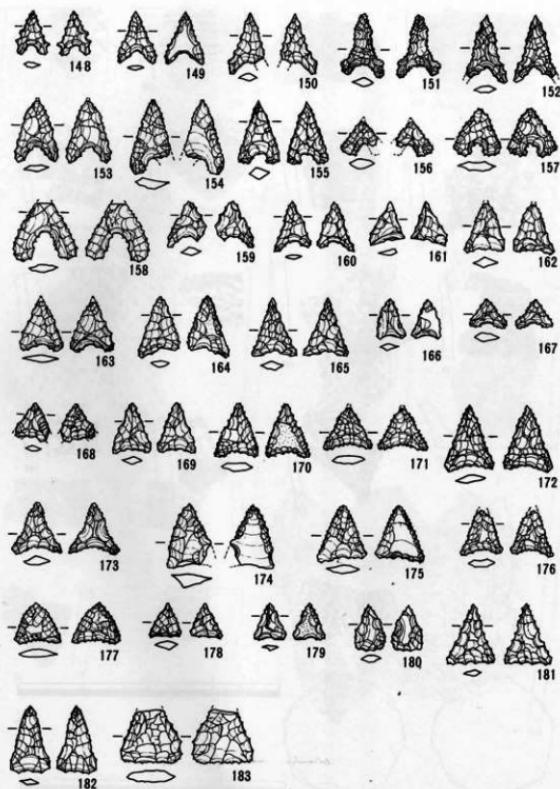
- 33 -



第22図 縄文土器実測図(8) S = 1 / 3  
- 34 -

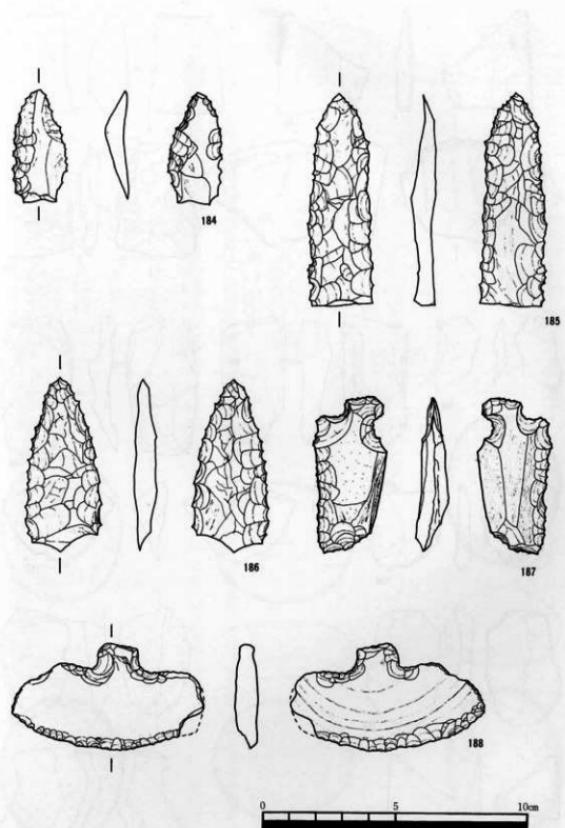


第23図 縄文土器実測図(9) S = 1 / 3  
- 35 -



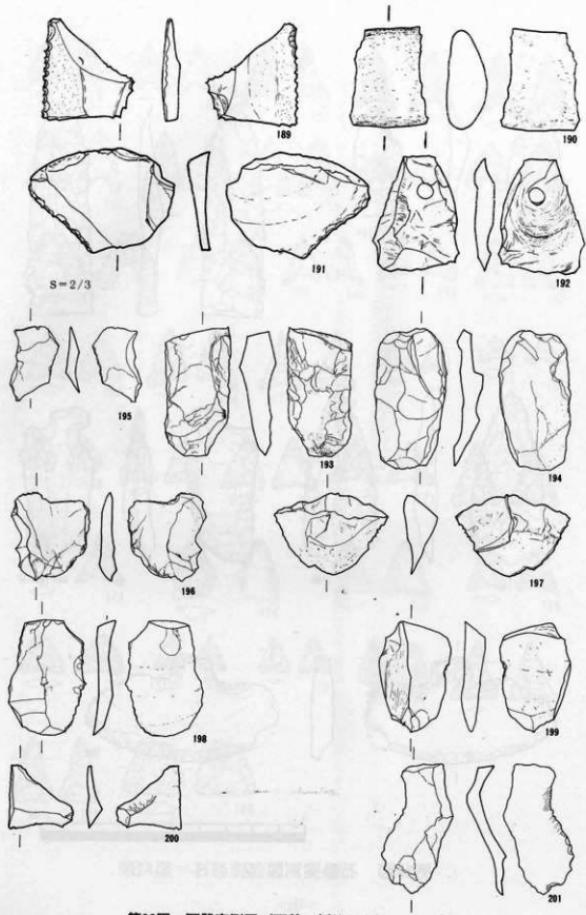
第24図 石器実測図（石鏃） S = 2 / 3

- 36 -

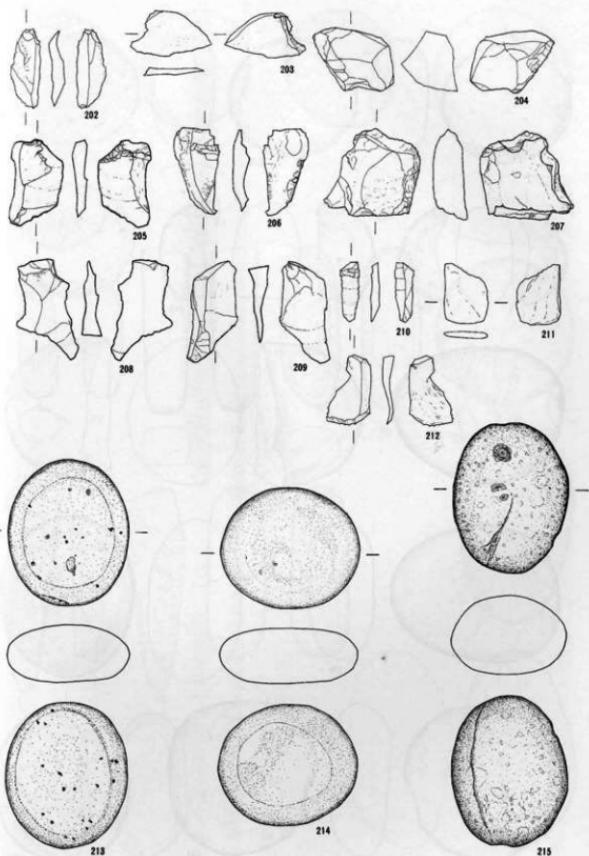


第25図 石器実測図(2) S = 2 / 3

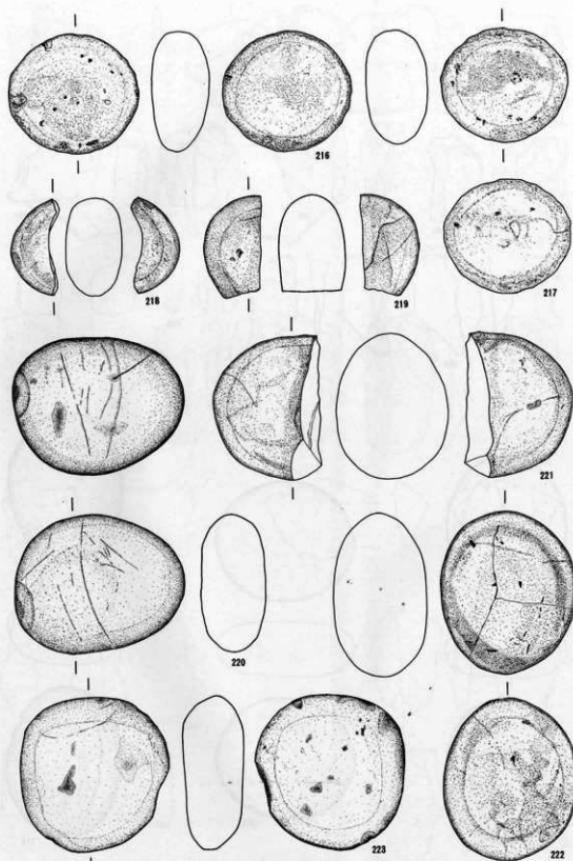
- 37 -



第26図 石器実測図 (石斧・剥片ほか) S = 1/3

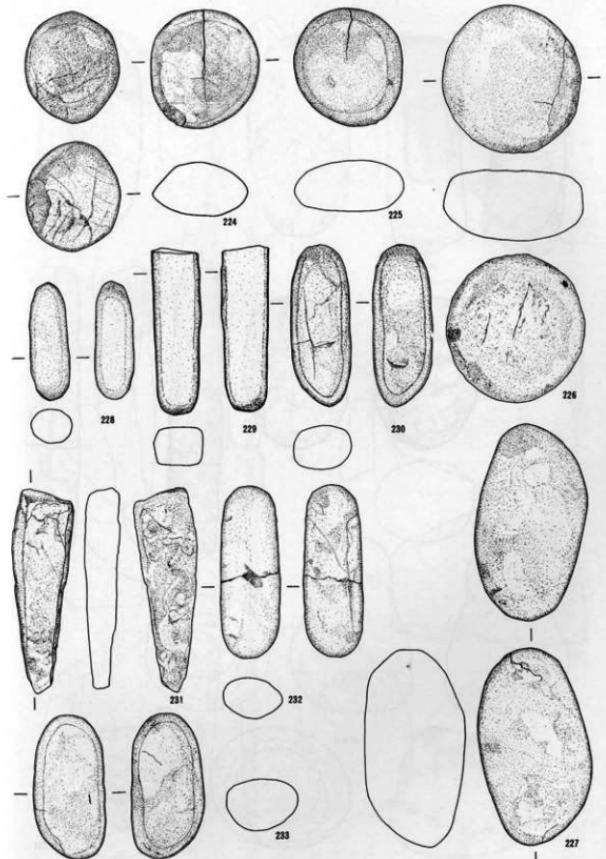


第27図 石器実測図 (剥片・磨石ほか) S = 1/3



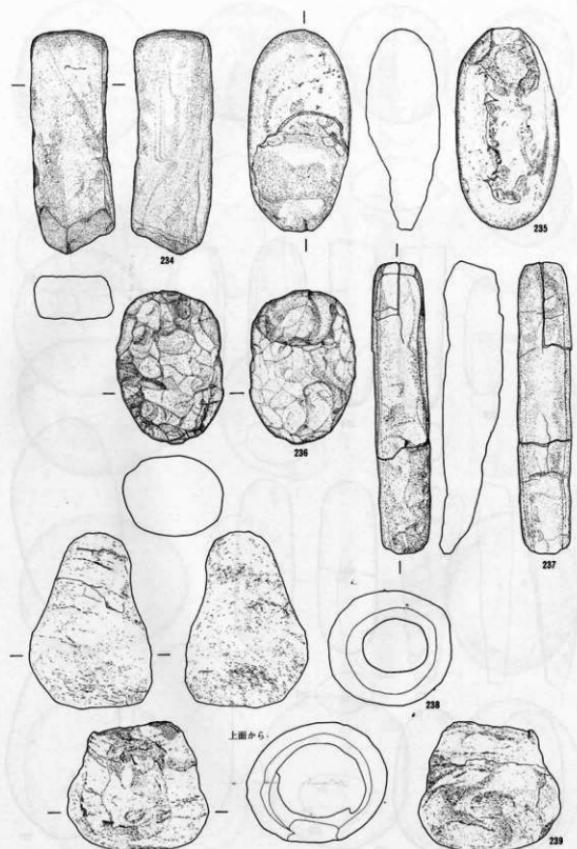
第28図 石器実測図(5) S = 1/3

- 40 -



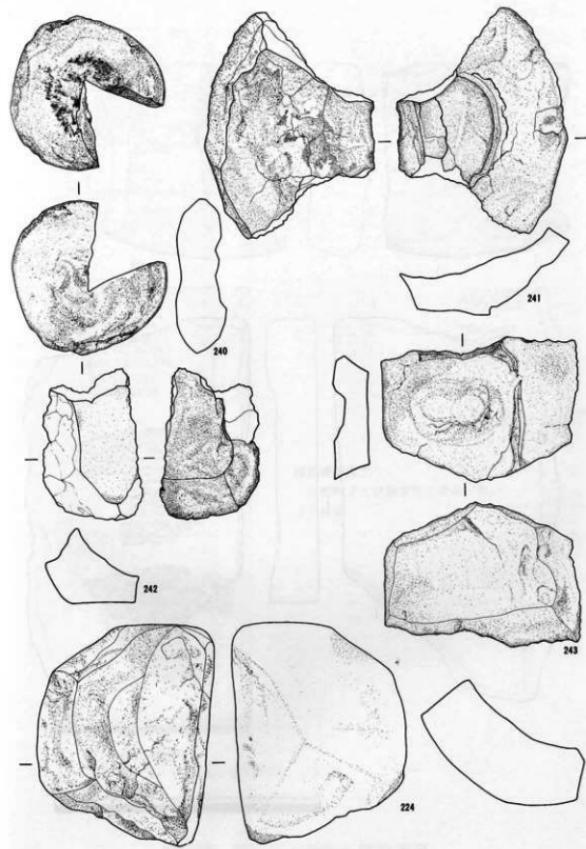
第29図 石器実測図(6) S = 1/3

- 41 -



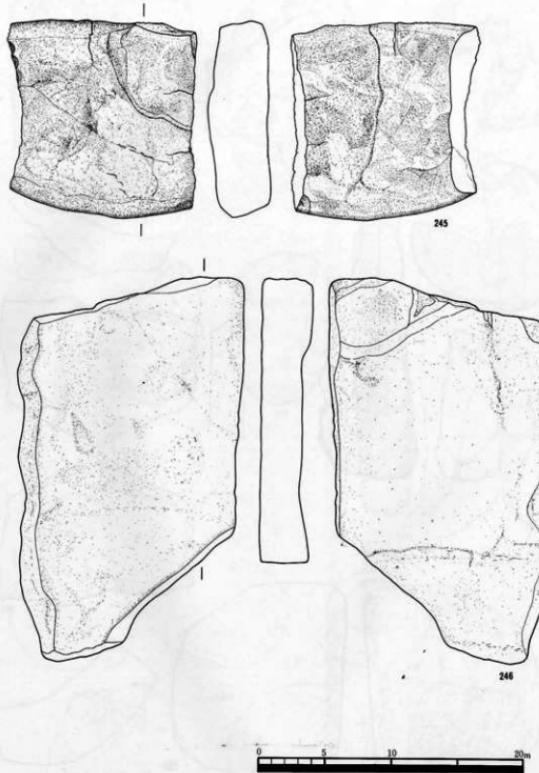
第30図 石器実測図(7) S = 1/3

-42-



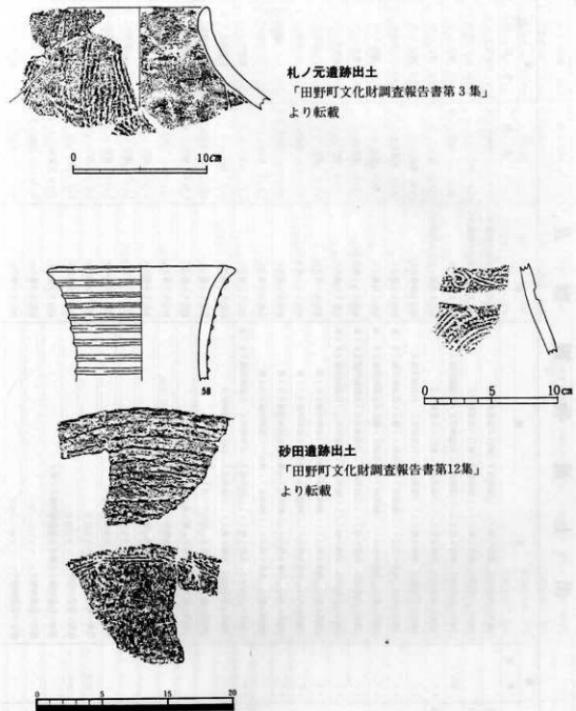
第31図 石器実測図(8) S = 1/3

-43-



第32図 石器実測図(9) S = 1/3

- 44 -



第33図 町内出土壺形土器実測図

- 45 -

表 索 索 観 観 物 遺 出 土



### 第三章 まとめ

122	22	臼	外縁に衝突痕の文			10YR 5/6 濃赤褐色 8/4	5YR 橙色 6/6	
123	22	臼	~ 斧頭			10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4
124	22	C	臼 鋸	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4
125	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4	7.5YR 5/6 淡赤褐色 8/4
126	22	B	CIM部~	ナメ		2.5Y 4/6 淡褐色 4/6	2.5Y 4/6 淡褐色 4/6	2.5Y 4/6 淡褐色 4/6
127	22	B	CIM部~	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
128	22	A	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
129	22	B	臼	落 磨耗のナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
130	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
131	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
132	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
133	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
134	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
135	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
136	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
137	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
138	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
139	22	B	CIM部~			5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
140	22	A	臼	落 磨耗		2.5Y 淡褐色 4/6	2.5Y 淡褐色 4/6	2.5Y 淡褐色 4/6
141	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
142	22	A	CIM部~	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
143	22	B	臼	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
144	22	B	CIM部	ナメ		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
145	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6
146	22	A	~	落 磨耗		10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4	10YR 5/6 淡赤褐色 8/4
147	22	B	臼	ナメ		5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6	5YR 橙色 6/6

今回の調査で、時期不明の土坑や縄文時代早期の集石遺構と主に早期の前葉から末葉にかけての土器や石器が確認され、この時期を中心とする遺跡であることが判明した。

住居跡等は確認されず、以前の調査の大半と同様の結果をみるに至った。集石遺構は密集はしていないもののある程度限られた範囲に位置することから、これ以外の空白部分が居住空間あるいは作業空間になったものと想定される。しかし、一つの小規模な尾根上において縄文時代早期という漠然とした長い年月のなかで、断続的ではあるが生活の痕跡が見られることは興味深いことであり、今後縄文時代の生活様式を考えうえで、これをいかに解釈するかは重要な課題となるであろう。

遺物については岩本式・前平式・下剥峰式・桑ノ丸式・手向山式・塞ノ神式に比定される土器のほか、あえてこれらに当てはめなかった土器等も出土した。個々の分布については、さほどまとまりは見られなかったが。

岩本式土器は芳ヶ迫第1遺跡について町内では2例目であり、砂田遺跡においてこれと類似したものが出土しているが、いずれも前平式土器を伴っており非常に興味深い。また、角筒土器については札ノ元遺跡において出土して以降、前平式・吉田式を問わず未だ出土していない。この特異性をいかに解釈するかは当町の縄文文化を考えうえで重要な課題である。

下剥峰式土器は調査範囲が限定されてはいるものの、4点のみの出土と特異な様相を呈する。

桑ノ丸式土器は内済した口縁部と櫛齒状施文具による羽状文が特徴とされるが、当遺跡の出土品はこれに限らず、器形・文様とともにバリエーションに富む。

手向山式土器も前記と同じ様相がみられる。出土量の全体に占める割合は最も高いものである。また、いわゆる「壺形土器」がみられ、町内における資料は札ノ元遺跡・砂田遺跡・二ツ山第1遺跡出土のものを含めて4点となった。今後、特にバリエーションに富んだ手向山式の中で、いわゆる「壺」の明確な定義がなされればと思う。

塞ノ神式土器は撚糸文が1点のみで、他はすべて条痕文系のものである。この特異な様相は当遺跡の特徴をある程度示すものとして捉えておきたい。

これらの他、爪形文を施す土器等時期設定を控えたものがある。爪形文については砂田遺跡に出土例があり、いずれ類例を調査し機を得て報告したい。近年は宮崎県下においても縄文時代の良好な資料がかなり増加した。しかしその編年等は他県に依存している部分が多く、明確な型式設定がなされていない資料も若干あるようで、特に早期については資料が充実してきたこともあり、そろそろ詳細な整理をすべき段階にきているように思われる。

石器については特に尾鈴山麓産の酸性岩類を石材とする磨石に注目せざるをえない。これは県下においてかなり分布してはいるものの、具体的な数量は出していないが特に当町内において多数の遺跡から出土する。打製石器の石材（あるいは製品）に搬入品が多いのに対して、石材にそれほどこだわる必要がないと考えられる磨石になぜこれを使用するのか疑問である。

～おわりに～

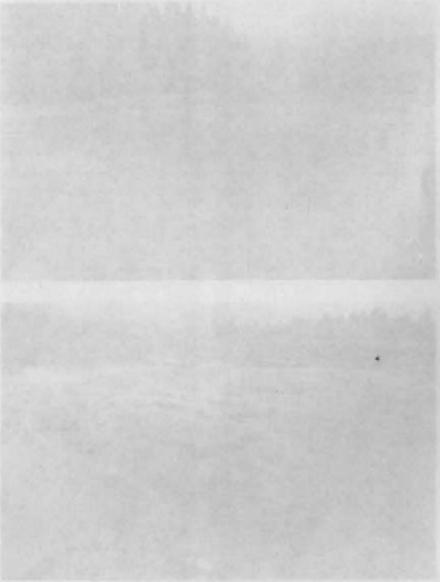
調査にあたっては地元地区の皆様をはじめ各関係機関並びに株式会社ニチボーグの皆様、川口敦氏（現ニチボー）に多大なるご理解とご協力を賜りましたことを、ここに記して感謝申し上げたい。

#### （参考文献）

- 田野町文化財調査報告書第1集～12集 田野町教育委員会
- 天神河内第1遺跡 1991 宮崎県教育委員会
- 天道ヶ尾遺跡II 熊本県文化財調査報告書111集 1990 熊本県教育委員会
- 大戸ノ口第2遺跡 1991 宮崎県高鍋町教育委員会
- 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』 1980
- 新東晃一「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』 1988 鎌木義昌先生古稀記念論集刊行会
- 新東晃一「早期九州貝殻文系土器様式」縄文土器大観1 1989 小学館
- 新東晃一「縄文早期の壺形土器」 南九州縄文通信No4 , 1991
- 河口貞徳「吉田式と前平式のその後について—南九州の早期縄文土器—」鹿児島考古第23号 1989 鹿児島県考古学会
- 『塞ノ神式土器－地名表・拓影・論考編－』縄文集成シリーズ2 1985 縄文研究会

## 写 真 図 版

(井手ノ尾遺跡)

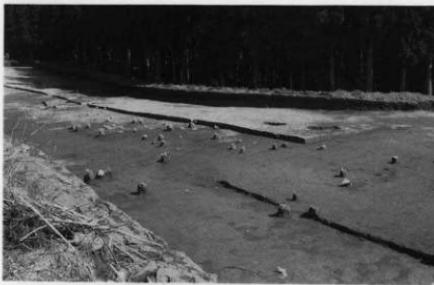


遺物出土状況  
(A区)





遺構検出状況  
(A区)



遺物出土状況  
(A区)



土層堆積状況  
(A区)



集石遺構検出状況  
(A区)



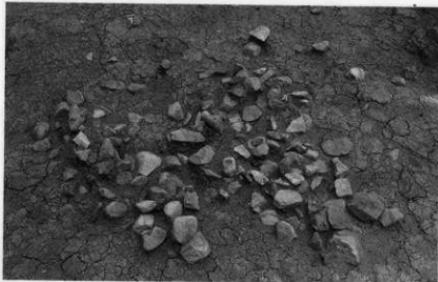
PL-4



S I -01



S I -01(下)



S I -02



S I -03



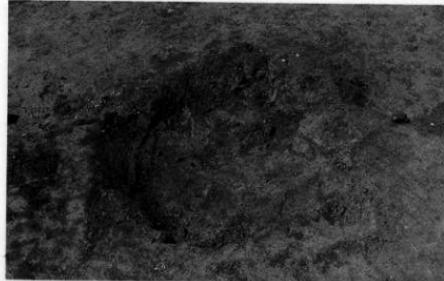
S I -04



S I -05

PL-5

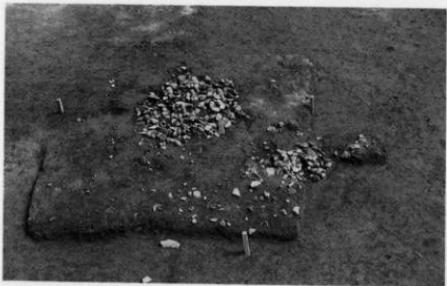
PL-6



SI-05(土坑)



SI-06



SI-07·08



SI-07



SI-07(下)



SI-07(土坑)

PL-8



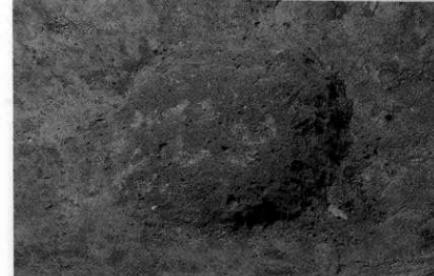
S I -08



S I -08(土坑)



S I -09



S I -09(土坑)



S I -10



S I -10(下)

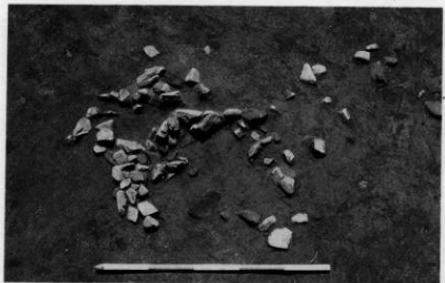
PL-10



S I -11



S I -12



S I -12(下)

PL-11



S I -13



S I -14・15



S I -16

PL-12



SI-16(下)



SI-17



SI-17(土坑)

PL-13



SK27~33



SK38~45



SK44~46

PL-14



B区全景



B区作業状況



遺物出土状況  
(B区)

PL-15



遺物出土状況  
(B区)



集石遺構検出状況  
(B区)

PL-16



S I 21~25



S I 20~25



S I -18



S I -19



S I -20

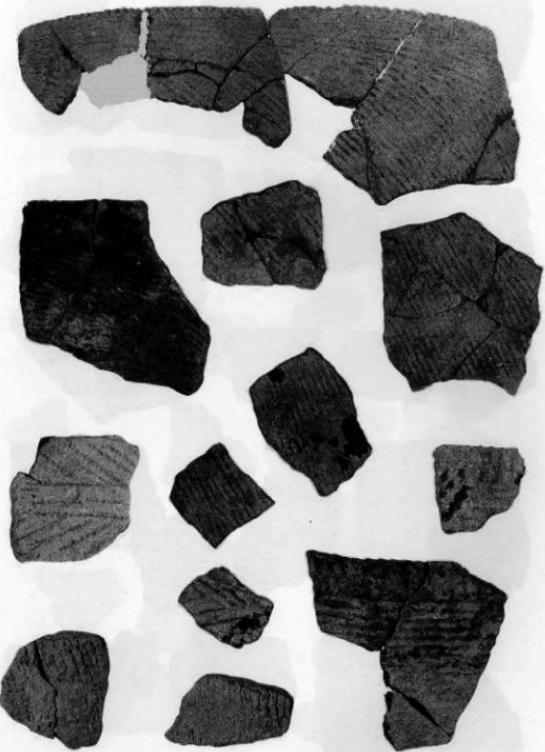


C区全景

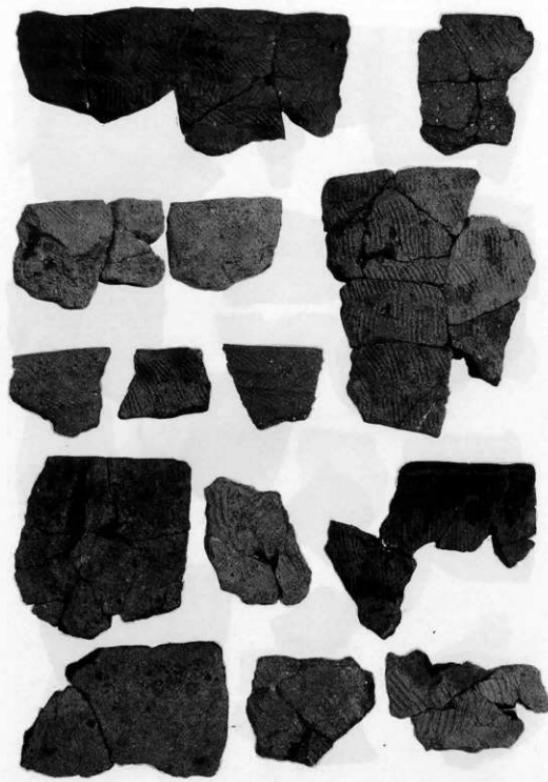
PL-18



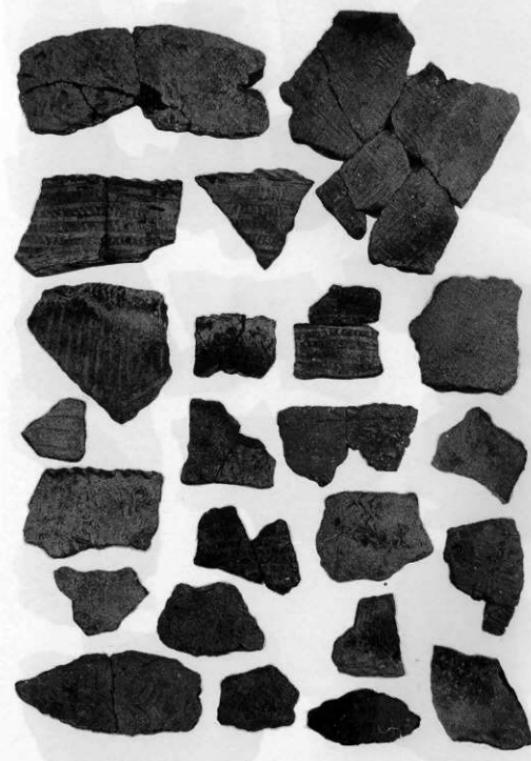
PL-19



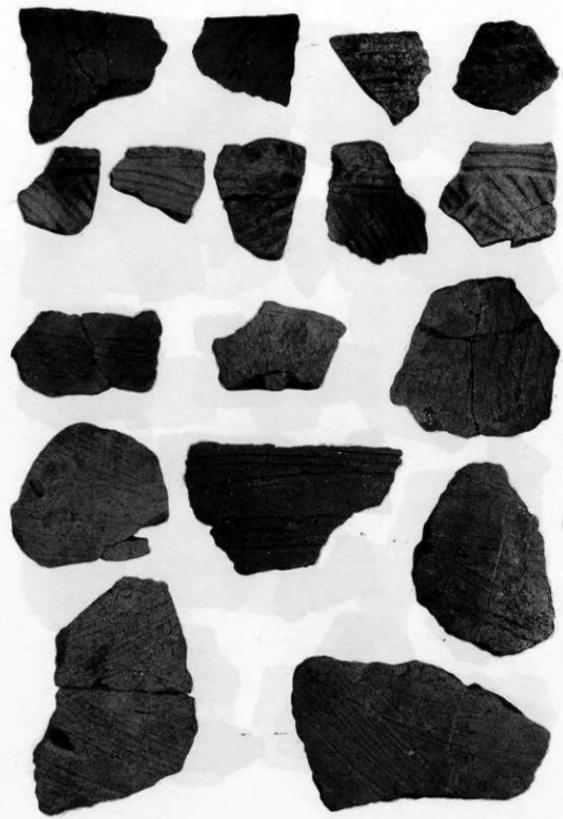
PL-20



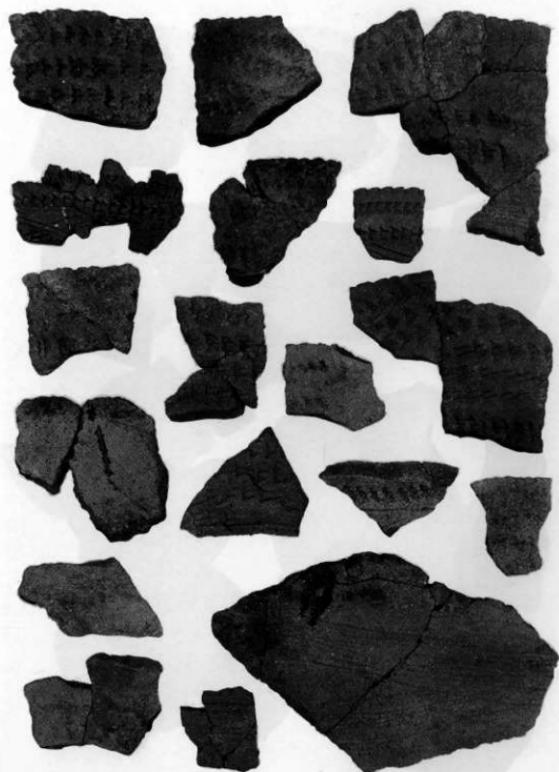
PL-21



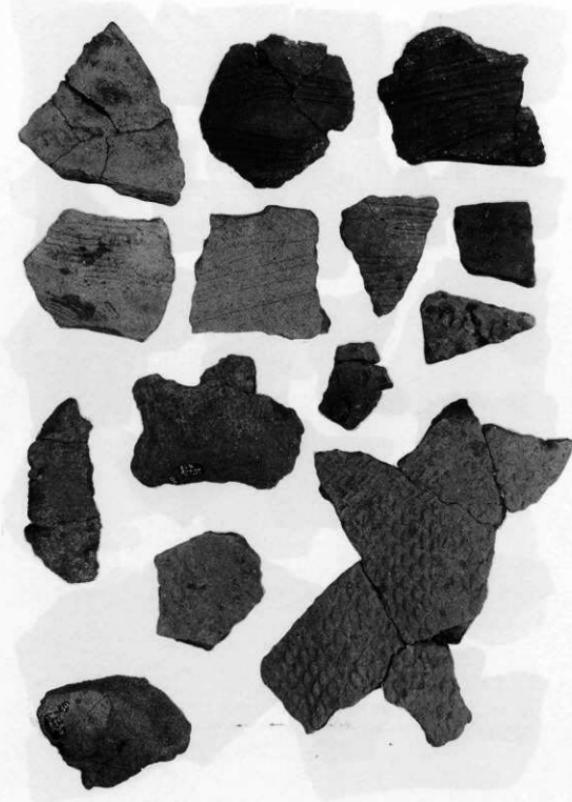
PL-22



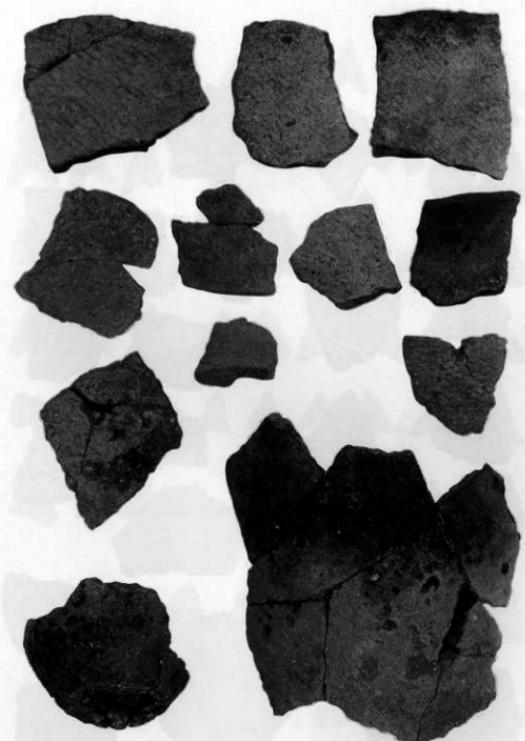
PL-23

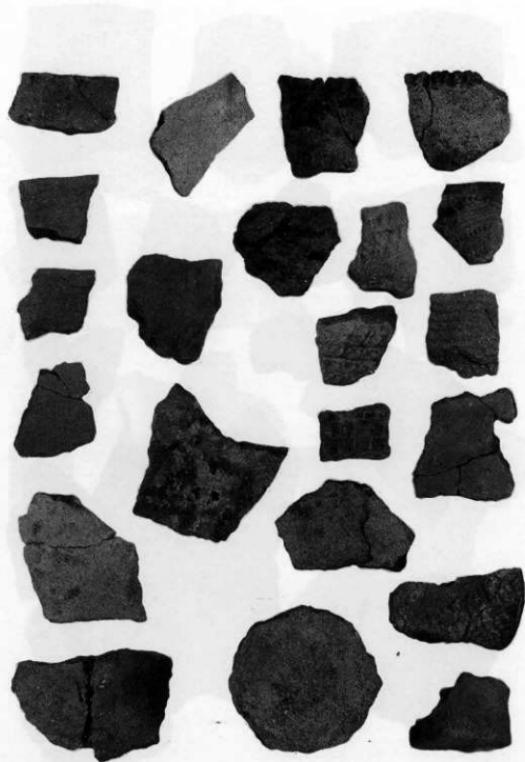


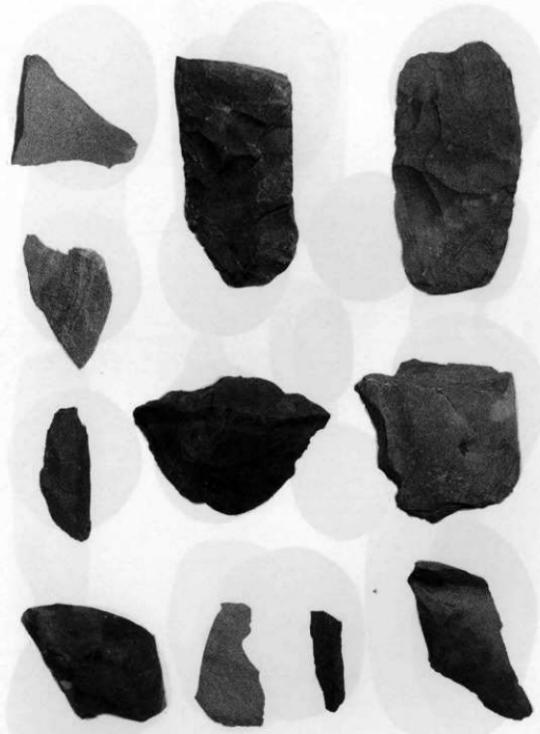
PL-24



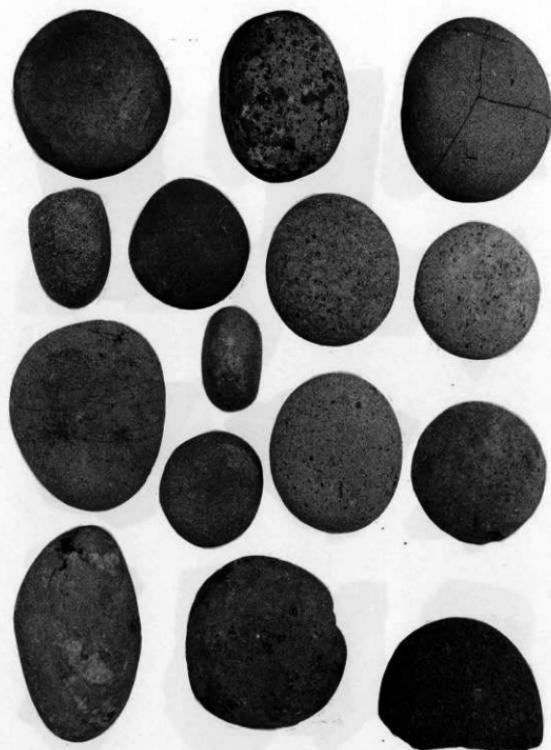
PL-25







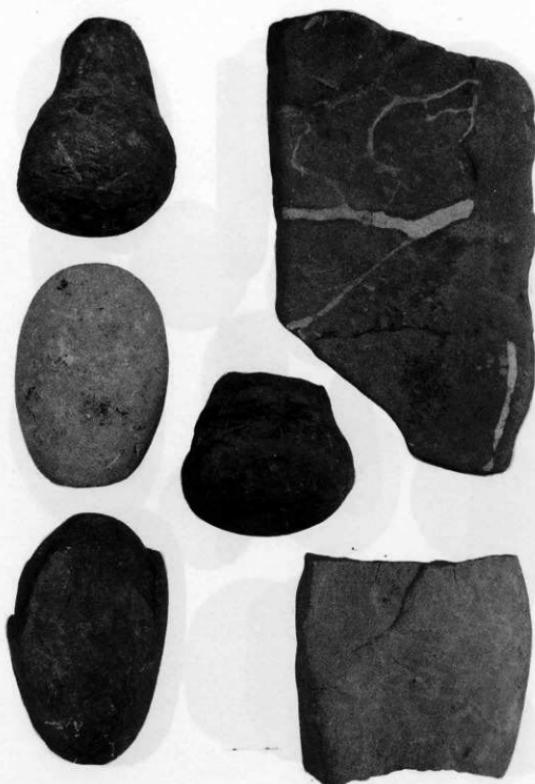
PL-30



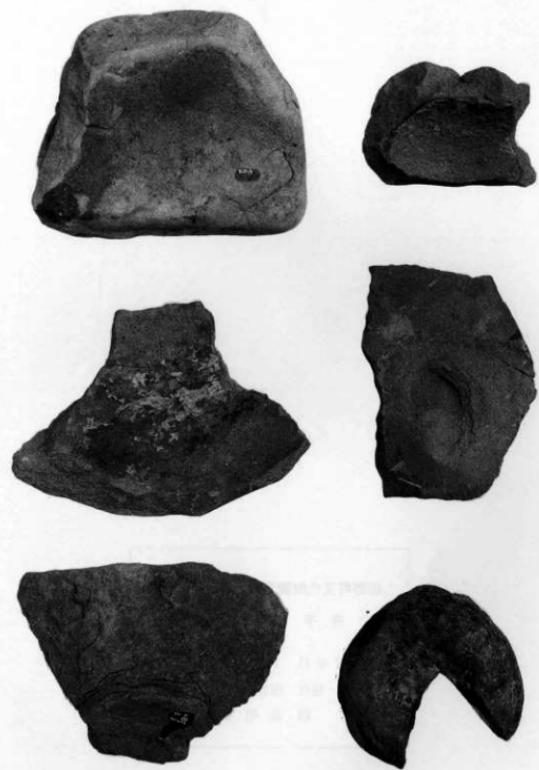
PL-31



PL-32



PL-33



田野町文化財調査報告書 第14集

井手ノ尾遺跡

発行年月 1992年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 (有)昭和印刷

